

光の差さない部屋だった。

窓は厚いカーテンで塞がれていて、外の景色はわからない。革張りのソファは黒くて、デスクの上には書類が積まれている。煙草の煙が薄く漂っていて、鼻の奥がつんとした。

（どうしよう。臓器とか売られちゃうのかな……）

連れてこられたのは、幅の広い男ふたりだった。「来てもらおう」というたった一言と、腕を掴む力だけがあって、目的地もなにも言われなかった。マンションのエントランスから乗せられた車は、どこをどう走ったのかわからない。ただ、着いたのは古いビルの地下駐車場で、エレベーターで上がった先の、この部屋に案内された。

闇金に手を出したのは半年前だ。

最初は十万円だった。

返せると思っていた。返せるはずだった。でも気づいたら利息が雪だるまになっていて、元本が消えないまま数字だけが膨れ上がっていった。電話は一

日に何度もかかってくるようになって、ある朝インターフォンで目が覚めた。

それが今日だった。

「はい、ここにいる女です」

はっと、振り向いた。開かれた扉の先で私を連れてきた人が、誰かに説明をしているようだった。

「そうか」

低い声だった。それだけで、部屋の空気が変わった気がした。

入ってきた男を見て、私は思わず息を呑んだ。

背が高い。立ち姿だけで部屋が狭くなる、という感覚を初めて理解した。肩幅があって、スーツの下にも体格のよさがわかる。首筋から腕にかけて、タトゥーが入っているのがシャツの袖口からわずかに見えた。

顔立ちは、彫りが深い。鼻筋が通っていて、口元

は引き結んでいる。

(すごいイケメン、だ……)

こんな状況なのに、最初にそうってしまった自分が信じられない。怖い、と思う前に、かっこいいと思ってしまった。

男は私をちらりと見た。品定めでも値踏みでもない、ただ確認するような目だった。それがかえって落ち着かなくて、私は視線を床に向ける。

「座れ」

男がソファを顎で示す。私は言われた通りに腰を下ろした。革のシートが冷たかった。

男はデスクの椅子を引いて、向かい側に座る。書類を一枚取り出して、テーブルに置いた。数字が見えた。私の借金の、総額だった。

(私の、借金の全額だ……)

当たり前だ。だからここに連れてこられたのだ。  
わかっていたのに、数字を目の当たりにすると体の  
奥が冷えた。

「今、全部払えるか」

男が言う。

「……払えません」

震えないようにして、私は答えた。

「そうか」

男は書類を手にとって、もう一度見た。煙草を一本取り出して火をつける。細い煙が天井に向かって流れていく。その仕草に色気があって、心臓が高鳴るようだった。

沈黙があった。男はなにも言わなかった。ただ見ている。その視線が重くて、私はソファの革の感触



を手のひらで確かめるようにぎゅっと握った。

「払えないか」

男が立ち上がって、こちらへ近づいてくる。一歩ごとに距離が縮まって、私は思わずソファの背もたれに身を引いた。でも逃げ場はなかった。男が私の真正面に立って、見下ろしてくる。

近くで見ると、余計に顔が整っていた。

そんなことを思っている場合ではないのに。

「全額返せないなら、お前の体で払ってもらおう」

事実を読み上げるような声だった。丁寧さはない。でも怒鳴りもしない。ただ、当然のことを言っている顔をしていた。

「そ、そんな……」

「嫌か？」

「い、嫌です……！ だって、そういうことは、」

「それが嫌なら、今全額ここで返せ」

「……っ！」

返す言葉が、なかった。

「じゃあ、ここで働いてもらう」

男はそれだけ言うと、煙草を灰皿に押しつけて消した。

「俺の相手をしろ。それで帳消しにしてやる」

一瞬、意味がわからなかった。

わからなくて、でも次の瞬間にはわかって、頭に血が上った。

「……っ、それって」

「言葉通りだ。セックスの相手をしろ」

「む、無理です……！ そんなの、そんなこと」

「お前の無理が通ると思うか？」

男は特に表情を変えなかった。怒っていない。ただ、答えを待っている。その落ち着きがかえって怖かった。

「お前に選択肢は二つだ。今ここで全額返すか、俺の相手をするか」

「そんな、どっちも……ッ」

「どっちも嫌なら帰っていい」

男がそう言った。

帰っていい。

(帰ったら、どうなる?)

頭の中で考えが回った。帰ったところで、借金は消えない。あの電話はまたかかってくる。インターフォンはまた鳴る。今日みたいに連れてこられる。それに今日はまだいい方かもしれない。次に呼ばれたら、問答無用でそういうお店に連れて行かれたり、暴力を振るわれるかもしれない。

わかっていた。選択肢なんて、最初からなかった。

「……期間は、いつまでですか……」

自分の声が、思ったより落ち着いていた。男が少し目を細めた。

「借金が消えるまでだ」

「それって……いつ」

「お前の態度次第だな」

（態度次第……）

男が私の顎に指をかけて、上を向かせる。強い力ではなかった。でも、逆らえなかった。

近い距離で目が合う。

整った顔が、ひどく間近にあった。目だけが、笑っていない。

「返事は」

低い声が落ちてくる。煙草の残り香がした。

「……わ、わかり、ました」

「俺は孝一郎だ。覚えろ」

「孝一郎、さん……」

「そうだ。じゃあ始めるぞ」

なにかを言う間もなかった。孝一郎さんは立ち上がりもせず、ただ手だけが伸びてきた。私のブラウスのボタンに指をかける。当然のことをする顔をしている。自然なことをしている顔で、指が動く。

(待って、心の準備が……！)

「……ッ」

でも声が出なかった。出し方がわからなかった。

「黒か」

ブラウスの前を開かれて、孝一郎さんが静かに言

う。視線が胸元に向いている。

「……外せ」

命令というより、事実の告知みたいな言い方だった。

「え……」

「聞こえなかったか」

繰り返しはしない、という空気だった。

私は背中を向けて、震える手でブラウスのボタンを外し、ブラを取り去った。孝一郎さんは手を出すわけでもなく、ただ待っていた。

「座るな。そこ立ってろ」

私がソファから立ったまま動かずにいると、孝一郎さんはゆっくりと立ち上がって私の周りを一周した。確認するような目だった。値踏みではなくて、

もっと事務的な確認の目。それがかえって落ち着かなくて、私は視線を床に向ける。

「形がいいな」

「……ッ」

顔が熱くなる。

（そういうことを、そんな普通の声で言わないでほしい……）

孝一郎さんはすでに次の動作に移っていた。まるで当然の確認をしているだけという顔で、こちらの羞恥など眼中にない。

「ん……っ♡」

ブラウスの上から、左の胸をつん♡と突かれる。  
右も同じように、つん♡つん♡と突かれる。おっぱいの形をなぞるように、指先がゆっくり動く。

答えを探すような動かし方だ。私は唇を嚙んでじっとしていた。

指先が脇のあたりから滑って、中央に寄っていく。乳首の周囲を、小さく円を描くように。反対側も同じ。答え合わせをするみたいに、几帳面に。

「ん……あ♡」

声が漏れた。先端に触れた瞬間、ブラウス越しなのにはっきりと感触があって、喉が開いてしまった。

つんつん、つん♡と小刻みにつつかれるたびに、腰のあたりがふわっとなる。止めたいのに体がそれを覚えてしまっている。

(やだ、しつこい……もうやめてよ……♡)

指先で執拗につつかれているうちに、嫌でも乳首が立ってしまう。布地の上からでもわかるくらいに。孝一郎さんの動きが少し変わった。押し込むように、ぎゅむっ♡と先端を押しつぶされる。



「あんっ♡」

思わず声が上がる。

「反応してるな」

「ち……ちがいます」

「なにが違うんだ」

「はあんッ♡♡」

言い返す前に、指に変わっていた。布越しにぎゅっと摘ままれて、思考が飛ぶ。

「立ってるだろ、これ」

「ん、あ♡ちが……ッ♡♡」

「強がっても意味ないぞ」

こりこり♡指先がイタズラに乳首を転がす。布の摩擦もあって、ダイレクトより余計にもどかしい刺激になる。孝一郎さんは私の後ろに回り込んでから、両胸を上から鷲掴みにした。

「あっ、や……ああッ♡」

「正直な体してるな」

感心したような声で言いながら、大きな手のひらがおっぱいを揉みしだく。乱暴なのに、妙に的確だった。こちらが嫌がる場所ではなく、反応が出る場所を狙っている。

「あっ♡ あん……はあん♡」

おっぱいを揉みながら乳首も忘れない。根元を摘んできゅっ♡と引っ張られると、体の芯からじわじわと熱が湧いてくる。

(もうやめて……変な感じになってきちゃう……♡♡)

立っていられなくて、前のテーブルに両手をついた。それでも腰が揺れるのが止まらない。自分でもわかる。

「あ、ああ……ッ♡ん、んッ♡ん～～♡♡」

ねっとりした手つきで乳首を捏ねられて、無意識に腰が前後してしまう。根元をぎゅっと摘んでくにくに♡と扱かれると、その硬さを意識させられて羞恥心が追いかけてくる。

むにゅ♡むにゅ♡むにゅ♡むにゅ♡  
こり♡こり♡こりこりこりこり♡  
むにゅ♡むにゅ♡むにゅ♡むにゅ♡むにゅ♡  
むにゅ♡むにゅ♡むにゅ♡

「ンンッ♡ん、ふうう♡はあん♡♡」

「感じてるならそう言えばいい」

「は……はあ……♡」

「ほら、返事をしてみろ」

「ん、あ……はいい♡ううッ♡♡」

孝一郎さんの指遣いは無駄がなく、律儀に私を追いつめてくる。乳首は芯を持ったように硬く、体の

中心に火が灯ったように熱い。乳首を苛められるたびに、下腹のあたりが疼く。

「あん、ああん♡♡ あぁ～ッ♡♡♡」

もう声を抑えられない。

(お願い……早く終わって……)

そう思っているのに体は正直だった。足の付け根がしっとり湿って、腰が揺れるのが止まらない。

こねこねこねこね♡

ぎゅむっ♡ きゅうう～ッ♡

「ンンンッ！！♡♡」

乳首の根元をぎゅっと摘んで引っ張られた瞬間、ビリビリと電流のような快感が背骨を走る。理性が決壊するのが自分でわかった。

孝一郎さんが爪を立てて指先で先端を引っ掻いて

くる。小刻みに擦ると布の摩擦も加わって、一気に快感が高くなる。首を振って「やめて」と口の形だけ作っても、手は止まらない。

(もう無理……乳首だけなのに、奥まで疼いてる…  
…♡♡)

「あうっ♡ あ、あぁっ♡♡」

脚がカタカタと揺れている。その様子が自分でも見えて、顔が熱くなった。

カリカリ♡ こりこり♡ と先端だけを小さく刺激されるのがたまらない。抗おうと力むと余計に内側を締め付けてしまう。頭が真っ白になっているのに、体だけが高まっていく。

(だめ……もうキちゃう♡ 乳首だけなのに気持ちよくて我慢できないっ♡♡)

こりこりこりこりこり♡

カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡ カリッ♡

カリッ♡カリッ♡

「んん〜〜〜ッ！！！！♡♡♡」

テーブルに手をついたまま、爪先立ちになってぶるぶると震えた。乳首だけの愛撫で、達してしまった。深い絶頂だった。余韻がじわじわと長く続いて、足がうまく動かない。

自分でもまさかと思っていたのに。

「はぁ……っ♡はっ……♡」

呼吸だけが荒い。孝一郎さんは手を離して、じっと私を見ていた。乳首だけで、達してしまった。その事実が今さらのように頭に広がって、耳の端まで熱くなる。

「今イったか」

「……イ……ってません……ッ♡」

「そうか。じゃあ確認するか」

言い終わる前に、スカートの裾を捲り上げられた。

「あっ……！」

一瞬で尻がむき出しになる。ストッキングとショーツだけになった下半身を、孝一郎さんは一言も言わずにじっと見た。ブラとセットの黒いショーツ。それをじっくりと見られる。

（視線が肌に触れるみたいで、じわりと熱が滲んできちゃう……ッ♡）

「下も黒か。黒が好きなんだな」

感心しているのか呆れているのかわからない声で言いながら、ストッキングの上から割れ目のあたりをするりと撫で上げる。もうおまんこは、しっとりしていた。

「濡れてるな」

「そ、そんな、ことは……ッ」

「なら確かめてみるか？」

「んあッ♡♡」

指が割れ目に食い込んで前後に動かされる。

くちゅくちゅ♡

「ん、や……あ♡ あ、あん♡ んううッ♡♡」

「感じてないんだろ」

「かんじてません……っ♡♡」

「……そうか」

間があった。

視線が割れ目のあたりに向いたまま、孝一郎さんは動じない。その落ち着きがかえって体の奥を締め付けて、愛液がじわりと滲んでくる。

「じゃあもう少し速くするか」

「んうう～♡」

動きが倍になる。ストッキング越しに指が擦れる



たびに、声が勝手に出てきた。足の力が抜けて、テーブルにしがみつくようにしながら、私はただ揺れていた。

くちゅくちゅ♡と熱い指で擦られ続ける。指の体温が布越しに伝わってきて、気持ちいいところに届きそうで届かない。愛液はじゅんじゅん溢れてストッキングまで濡らしそうだった。

(やだ……やだ、こんなの……ッ♡布越しなのに指の熱が伝わってくる……♡♡)

何度もおまんこを擦られているうちに腰が勝手に前後し始める。もっと強く当ててほしいと、体が正直に訴えていた。それがわかって、余計に恥ずかしかった。

「ん……ッ♡やだ……♡♡」

声が漏れて、腰の動きがどんどん大きくなっていく。恥ずかしいのに、止められない。

「んっ♡ んうう……ッ♡ あっ、ああ……♡♡」

ストッキング越しの摩擦が、じわじわと体の芯に響いてくる。指の圧力が割れ目に食い込むたびに、内側がきゅっと締まってしまうのがわかる。

「ん……っ♡ あ……ッ♡♡」

孝一郎さんの動きが少しずつ変わっていく。角度を傾けて、割れ目の形に沿わせるように指を動かす。感じる場所を探すような、的確な動かし方だった。

「あ、あん♡ やっ……そこ……ッ♡♡」

（どこで反応するか、確かめながら動かしてる……♡♡ そんなに丁寧なされたら、余計に……）

愛液がじゅわりと溢れて、指を伝って膝の内側まで垂れてきた。そこまで濡らしてしまっていたのだと気づいて、頭が沸騰しそうになる。

「んう……ッ♡ ふあ……っ♡♡」

「やっぱ濡れてるじゃないか」

独り言みたいな声だった。そう言うなりストッキングの縫い目に指をかけて、ためらいもなく引き裂いた。

「やっ♡ やだ、いやあ……ッ♡♡」

乱暴な指はそのまま止まらず、ショーツを横にずらしてしまう。

濡れたおまんこがすっかり丸見えになってしまう。私はほとんど泣き声になっていた。孝一郎さんは私の反応などまるで気にしない。花びらに指を添えて、くばあ♡ と開くと愛液が零れ落ちた。

「あっ……♡ やっ、見ないで……ッ♡♡」

（孝一郎さんに、全部見られてる……ッ♡♡ なん  
でこんなことするの、なんで……♡♡）

おまんこを見られている。それだけで、場所がじわりと熱を持つ。ヒクヒクと震えているのが自分でもわかって、でもどうにもできない。

「感じてないって言うのに、こっちはこんなになってるんだな」

「かんじてません……ッ♡♡」

「クリも膨らんでるぞ」

「そ、それは……♡♡」

「借金のカタで来てここでこれか。お前、自分が何しに来たかわかってるか」

「うう♡♡ うんんッ♡♡」

孝一郎さんが指を伸ばしてクリトリスをこねる。そこはしっかりと勃起していて、弄りやすくなっていた。

くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅ♡  
くちゅ♡ くちゅ♡

「ああん♡ はあッ♡♡ あひい♡♡」

押し潰すつもりでクリトリスを捏ね繰り返される。  
乳首でイッた直後の体には刺激が強すぎて、痛みと  
快楽の境界がぐにゃりと曖昧になっていた。

「ん……ッ♡ あ、あっ♡ ひあん！！♡♡」

（乳首でイッたばかりなのに……ッ♡ まだ余韻が  
残ってるのに、今度はクリを苛めてくる……♡ 敏  
感になってる分、指が触れるたびに体がビクビクし  
ちゃう♡♡）

「んっ♡ んっ♡ んぁあッ♡ んうううッ♡♡」

ローテーブルに両手をついたまま体重を預ける。  
自分の足で立っている感覚がない。後ろに突き出し  
た腰がぴくん、ぴくんと跳ねて、孝一郎さんの指先  
に勝手に応えてしまう。

（やだやだやだ♡ クリ弄るのやめてっ♡ またイッ  
たら何て言われるか……ッ♡ 絶対に我慢しないと、  
絶対に……ッ♡）

でも我慢しようとすればするほど、快感に意識が集中してしまう。クリトリスをくるくると転がされるたびに、内側がぎゅうっと締まって、奥がじんじんと疼く。

ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡  
ぐちゅ♡ ぐちゅ♡

「はっ♡ ふ、ふあっ♡ んひいッ♡♡ あっ♡ ひい  
んッ♡♡ やっ、そこッ♡♡」

包皮を剥くように指が動く。ぷるんっと顔を出したそこを、親指の腹でゆっくりと押し潰される。

こりッ♡ こりッ♡ こり♡ こりこりこり♡

「ひゃっ♡♡ あ、あぁン……ッ♡ そこっ、そこは  
だめえ……ッ♡♡」

（だめっ♡♡ 剥いてこねるの、気持ちよすぎる…  
…ッ♡ クリがビリビリして、奥まで響いてくるう  
♡♡）

「ひい……ッ♡ ん、あぁン……ッ♡♡」

視界がチカチカする。脚の力が完全に抜けて、テーブルに爪を立てて堪えた。それでも腰がカクカクと揺れるのを止められない。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「あんっ♡あんっ♡んうう♡♡やっ♡やだっ♡♡  
♡ゾッ……♡ゾゾ〜〜〜ッ！！♡♡♡」

ガクガクッ♡

全身が引き攣るように震えて、今度はクリトリスだけで達してしまった。

（イッた……ッ♡♡またイッちゃった……♡さっきは乳首で、今度はクリで……どうしよう、こんな体じゃなかったのに♡♡）

「……もうイッたのか」

低い声が落ちてくる。

「ちっ……ちが……っ♡♡」

孝一郎さんはなにも言わなかった。ただ、指の動きが変わった。

余韻で震える体に、指が止まらない。

（まだ……ッ♡ まだ触ってくる……ッ♡♡ イッたばかりなのに）

ぐりっ♡ ぐりっ♡ こりこりこり♡

「ひぁ……ッ♡ や……っ♡♡ もう、もう無理……っ♡」

「無理じゃないだろ、イってないんだから」

声が淡々と落ちてくる。そのまま、包皮を剥いた状態で直接クリトリスを転がされる。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「ひゅッ♡♡ そっ……そこっ、直接は……っ♡♡」



(剥いたままこねてくる……ッ♡ 敏感すぎて、触れるたびに腰が勝手に動いちゃう……ッ♡♡ こんなにしつこく責められたら……ッ♡♡)

腰がカクカクと揺れて、自分では止められない。クリトリスがじんじんと脈打って、奥まで痺れが走る。

「あっ♡ あっ♡ やっ……ふあぁッ！！♡♡」

孝一郎さんは無言で指を動かし続ける。速くなったり遅くなったりしながら、逃がさないように角度を変えて追いかけてくる。腰を引いても体を振っても、指は離れない。むしろ角度を変えて、さらに的確に当たってくる。

くちゅっ♡ くちゅっ♡ こりっ♡ こり♡ ぐりこりぐり♡

(やだ……やだやだやだ♡♡ またきちゃうッ♡♡ もう三回目なのに……ッ♡♡)

我慢しようと息を詰めた瞬間、指先がクリトリスをぐっと押し込んだ。

ぐりいいいッ♡

「あッ♡ んああああ！！♡♡♡」

ガクガクガクッ♡

全身が引き攣るように震えて、腰がひとりでに前後した。頭の中が真っ白になって、どこからどこまでが自分の声なのかわからない。

（また……ッ♡♡ またイッちゃった……ッ♡ 乳首とクリで……♡♡ もう三回も……ッ♡♡）

「今のは？」

「ん……ッ♡ あ……♡♡ い、いまの、は……ッ♡♡」

荒い息のまま、膝だけで立っているような状態だった。それでも孝一郎さんの手は止まらない。

「次いくぞ」

当然みたいに、言葉が落ちてくる。

「え……ッ♡ ま、待って……ッ♡」

返事を聞かずに、指が花びらの間に沿う。直接触れられているのがわかって、腰がびくっと引いた。でも後ろには孝一郎さんがいて、どこにも行けない。  
ぬるっ♡

（やだ、こんなに濡れてる……ッ♡ 自分でわかるくらい、ぐちょぐちょで……ッ♡♡）

「かなり濡れてるな」

孝一郎さんの指先がゆっくりと入口を確かめる。縁をなぞるように、くるくる♡ と円を描いてくる。ナカに入れるわけでもなく、ただ入口だけをなぞり続ける。

くちゅ♡ くちゅ♡ くちゅっ♡ くちゅっ♡

「あ……ッ♡ ん……ッ♡ そこ……♡♡」

(入れてくれるのかと思ったら、入口だけぐるぐるして……ッ♡ もどかしいのに、余計に意識しちゃう♡♡)

「もっと欲しいか？」

「ちっ……ちがっ♡」

「そうか」

ちゅぷっ♡ と音を立てて、一本だけナカに入ってくる。

「ひっ♡♡」

思ったより奥まで来る。ゆっくりと、でも確実に、第二関節まで。指の形がそのままわかるくらいに、内側が広げられていく。

ぐちゅぐちゅ♡ ぬちゅっ♡

(孝一郎さんの指が……ナカに……ッ♡♡ 膣内がじわじわ広がっていく感じ、変なの……♡)

「狭いな」

独り言みたいな声だった。感情がない。ただ事実だけを言っている。それがかえって恥ずかしくて、耳が熱くなる。

「ンッ……♡ あっ♡ あっ♡ んうう……ッ♡♡」

指が動き始める。ゆっくりと引いて、また押し込まれる。弱いところを探すように、角度を変えながら丁寧に動く。

ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅ♡ にゅぐ♡ ぐちゅ♡ にゅぐ♡

「ああん♡ は……っ♡ んひい……ッ♡♡」

鉤状に曲がった指が、膣壁の前側をゆっくりと撫でる。そこだけ感触が違う。ざらっとした場所に指腹が当たった瞬間、腰が勝手に引いた。

「あッ♡♡ そこ……っ♡ そこはだめっ♡♡」

「ここか」

「やっ♡ やだッ♡ んんッ♡♡」

そこだけを、ゆっくりとゆっくりと、擦り上げてくる。

ぐりっ♡ ぐりっ♡ ぐりぐりぐり♡ ぐちゅっ♡  
ぐちゅっ♡ ぐちゅ ぐちゅ♡

（ナカが……ッ♡ ジンジンして溶けそう……ッ♡  
♡ そこばかり触れてくるの、おかしくなっちゃ  
う♡♡）

「ふああ……ッ♡ ああッ♡ やっ♡♡ んう う……ッ  
♡♡♡」

指が一本から二本に増える。じゅぷっ♡ と音を  
立てて、一気に奥まで入ってくる。

「ひうッ♡♡ ふか……深いッ♡♡ あッ♡♡」

（二本……ッ♡ 一気に来た……ッ♡ 広げられてる

感じ、変なのに気持ちよくて……ッ♡♡)

「締まってるな」

「ん……ッ♡ それは……ッ♡」

「お前が締めるから余計動けないな」

「んッ♡♡ うんんッ♡♡」

二本指がゆっくりとかき回される。左右に広げるような動きで、内側が引き伸ばされる。その感触に、足がカタカタと震えた。

じゅぽっ♡ じゅぽっ♡ じゅぽっ♡

ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぬちゅっ♡ ぬちゅっ♡

ぐぽ♡ ぐぽ♡ ぐぽっ♡

「あんッ♡ あんっ♡ んぁ……ッ♡ ふぁぁぁ……ッ♡♡」

抜き差しのたびに、下品な水音が部屋に響く。自分が濡らしているのだとわかって、頭が沸騰しそうになる。

（やだ……こんな音、聞こえてる……ッ♡ ぐちょ  
ぐちょすぎて止まらないの、孝一郎さんにぜんぶわ  
かってる……ッ♡♡）

「ひい……ッ♡ や……ッ♡ んッ♡ んッ♡ んッ♡  
♡」

指がぐっと奥を押す。天井側を指腹で抉るように  
擦り上げてくる。弱いところを正確に、執拗に、何  
度も何度も。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡ ぐぽぐぽぐぽ♡  
ぐりぐりぐりぐりぐり♡

「ああッ♡ ああッ♡ やっ♡ そこ……ッ♡ そこぐ  
りぐりしないでえ……ッ♡♡」

やめてと言っているのに声が甘くなっている。孝  
一郎さんはそれを聞いても手を止めない。むしろ動  
きを大きくする。

「あっ♡ あっ♡ ふあッ♡ ひう……ッ♡♡ んぁあ



あ……ッ♡♡♡」

（奥が熱い……ッ♡ ナカがジンジンして、指に吸い付いちゃう……ッ♡ おまんこが自分の意思とは別に動いてる♡♡）

「感じてないんだろ」

「ん……ッ♡ かんじ……て……ッ♡♡」

「感じて、なんだ？」

「んあああ……ッ♡ んんんッ♡♡♡」

言葉にならなかった。指が加速して、頭の中が快楽一色に染まっていく。膣がきゅうきゅうと締まるのが自分でわかる。離したくないと言うみたいに、指を呑み込んでしまっている。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡ ぐぽぐぽぐぽ♡ ぐりぐりぐりぐりぐり♡

「ああッ♡ ああッ♡♡ やあ……ッ♡ やだやだやだッ♡♡ ふああああ……ッ♡♡♡」

（くる……ッ♡♡ またくるッ♡ おまんこぐちゅぐちゅされてるだけなのに、またイきそう……ッ♡♡

♡)

「ひいん♡♡ や……っ♡ イく……ッ♡♡ イッちゃい……ッ♡♡♡」

「少しイきすぎだ。止まらないのか」

「ゾッ♡♡ む、無理……っ♡♡ もう無理い……ッ♡♡♡」

ぐぼっ♡ ぐぼっ♡ ぐぼっ♡ と速くなる指の動きに合わせて、腰がひとりでに揺れる。

「んああああッ！！！！♡♡♡」

ガクガクガクガクッ♡

全身が痙攣した。膣が指をぎゅうう～～♡と締め上げて、強い絶頂が体の奥から弾けた。足が折れそうになって、テーブルに全体重を預けるように倒れ込む。

（イッた……ッ♡♡ またイッちゃった……ッ♡ 指でイカされた……ッ♡♡♡ どうしよう、もう何回

目か、わからなくなってる♡♡)

膣がまだヒクヒクと締め付けを繰り返している。  
孝一郎さんの指がゆっくりと動いていて、余韻の中  
で触れるたびに体がビクンッと跳ねた。

「ん……ッ♡ あ……♡♡ まだ……動いてる……ッ  
♡♡」

「お前が離さないからだろ」

孝一郎さんがゆっくりと指を引き抜いた。ヒダが  
未練がましく絡みついて、にゅぽんっ♡ と音を立  
てて離れる。

「あッ♡♡」

抜かれた感触に体がビクンと跳ねた。空になった  
内側が、ヒクヒクとまだ収縮を繰り返している。

(終わった……ッ♡ やっと……♡♡)

孝一郎さんは指についた愛液を無造作にタオルで拭った。こちらを見もせず、当然のことをする顔をしている。

「これだけ反応がいいなら楽しめそうだ」

褒めているのか、ただ確認しているのか、よくわからない言い方だった。

(楽しめそう……って、私を……ッ♡)

恥ずかしさと、なにか別の感情が混ざって、頭の中がうまく整理できなかった。

孝一郎さんは立ち上がって、ドアの方に体を向けていた。まるでさっきまでのことなどなかったかのような顔で。

「明日から俺の呼び出しにはすぐ来るように」

「……え」

「借金、返したいんだろ」

「……は、はい」

「なら頑張れよ」

(明日から……ッ♡ また、今みたいにされるって  
こと……？♡)

脚の震えがまだ完全に引いていない。スカートを  
整えて、乱れた息を整えながら、私はゆっくりと立  
ち上がった。

「……わかり、ました」

声がうまく出なかった。孝一郎さんは私の言葉を  
聞き届けると、さっと扉を開けて出ていった。

体はまだ熱くて、足元がふらついた。

(また明日も呼ばれるんだ……)

それだけがはっきりとわかって、私は静かに扉を  
閉めた。

\* \* \* \* \*

翌日から、私はあの部屋で生活することになった。荷物は最低限でいい、と言われた。食事は用意される。外出は自由だが、呼ばれたらすぐ孝一郎さんの相手をする。それだけが条件だった。

呼び出し、と最初は言っていた。でも実際には違った。

孝一郎さんはいつも予告なく部屋に来た。昼でも夜でも、時間に関係なく扉が開いて、孝一郎さんが入ってくる。そのたびに私はソファに押しつけられて、気が済むまで何度もイカされた。一度では終わらない。二度でも終わらないことがほとんどだった。孝一郎さんが「もういい」と言うまで、私の体は弄ばれ続けた。

そして今日も、扉の音で目が覚めた。

「起きてたか」

孝一郎さんが上着を椅子にかけながら言う。

「……起きてました」

「そうか」

それだけで、もう近づいてくる。言い訳も前置きもない。当然のことをする顔で、私の顎に指をかけて上を向かせる。

（また来た……ッ♡ 今日で何回目だろ……）

唇が触れる前に、指が先に動いた。シャツの裾から入り込んで、素肌を撫で上げてくる。脇腹を通過、胸の下をゆっくりなぞる。

「ん……ッ♡」

じわ、と熱が滲んでくる。条件反射みたいに体が

反応してしまうのが、自分でも嫌になる。

（孝一郎さんが触れるたびに、すぐ体が覚えてしま  
う……ッ♡）

大きな手のひらがおっぱいを包む。揉みしだくとい  
うより、形を確かめるような動かし方だった。でも次第に指先が乳首を探り当てて、軽くつまんでく  
る。

こりっ♡ こりっ♡ くりくり♡

「ん……ッ♡ あっ……♡♡」

「すぐ立つな」

「ああ……ッ♡」

指先がくりくりと転がすたびに、体の芯がじわじ  
わと熱を持ってくる。乳首だけで、もう下腹が疼き  
始めていた。

（やだ……もうこんなに……ッ♡ 孝一郎さんに触



れられるとすぐ体がそっちに向いてしまう♡♡)

むにゅ♡むにゅ♡むにゅむにゅ♡こりこりこり  
こり♡きゅう♡

「ふあ……ッ♡ん……ッ♡やっ、引っ張らないで  
……ッ♡♡」

「引っ張る方が反応がいいだろ」

「そ、それは……ッ♡♡」

根元をぎゅっと摘んで、ゆっくりと引き伸ばされる。痛みと快感の境目が曖昧になって、腰が勝手に揺れた。

きゅう♡こりい♡くりくりくり♡ぎゅ  
むっ♡

「ああん……ッ♡♡や……やだ……ッ♡んッ♡ん  
ッ♡♡」

(乳首だけなのに……ッ♡おまんこがじわじわ濡  
れてくる……ッ♡♡体がもう全部覚えちゃってる

♡♡)

孝一郎さんの手が下に移動する。スカートの中に入り込んで、ショーツの上から割れ目を押し当ててくる。

「やっぱり濡れてるな」

「ん……ッ♡ それは……ッ♡♡」

「強くされた方が反応がいいな」

くちゅっ♡ くちゅっ♡ くちゅくちゅ♡

「ひぁ……ッ♡ あっ♡ あん♡♡ そこ……ッ♡♡」

布越しにクリトリスを押し込まれる。じわっと快感が広がって、足がカクッと折れそうになった。テーブルに手をつきながら、腰だけが孝一郎さんの指に押しつけられていく。

(また始まる……ッ♡♡ 今日も、気が済むまで終

わってくれない……ッ♡♡)

くちゅくちゅくちゅ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ こ  
りっ♡ こりぐりこり♡

「あんっ♡ あんっ♡ ふああ……ッ♡♡ んうう……  
ッ！！♡♡」

孝一郎さんはなにも言わない。ただ、指が動き続  
ける。今では、それが一番怖かった。

ショーツをずらされた。指が直接、濡れたおまん  
こに触れる。

「ひう……ッ♡♡」

布がなくなった分、感触がダイレクトに伝わって  
きて、思わず腰が引いた。でも逃げるより先に指が  
追いかけてくる。花びらをかき分けて、中心を探り  
当てる。

「もうクリも膨らんでるな」

「ん……ッ♡ こ、孝一郎さんが触るからっ♡♡」

「お前がそういう体なんだろ」

ぐちゅっ♡ くちゅっ♡ ねとねとねと♡ こりっ♡  
こりっ♡

「あっ♡ あっ♡ や……っ♡♡ そこばかり……ッ  
♡♡」

クリトリスをくるくると転がされる。包皮の上から押しつぶすように、親指の腹でぐりぐりと圧をかけてくる。乳首でさんざん焦らされた後だから、もう体の閾値が低くなっていた。

(やだ……もうすぐきちゃいそう……ッ♡♡ まだ始まったばかりなのに♡♡)

ぐりぐりぐり♡ こりこりこり♡ くちゅくちゅく  
ちゅ♡ ねとっ♡ ねとっ♡

「ふああ……ッ♡ んッ♡ んッ♡♡ やっ、やだ……  
っ♡♡」

腰がカクカクと揺れる。テーブルに爪を立てて堪えようとしても、体の動きが止まらない。指に押しつけるような腰の揺れが、自分でもはっきりわかる。

「腰が動いてるぞ」

「う……ッ♡ うごいてませ……ッ♡♡ ああん♡♡」

「動いてないのか」

意地悪な確認だった。そのまま、包皮をぺろりと剥いてくる。ぷるんっ顔を出したクリトリスに、直接親指の腹を押し当てられる。

「ひゃうッ♡♡ そっ……そこ直接は……っ♡♡ ビリビリするう……ッ♡♡」

（剥いて直接触れてくるの、気持ちよすぎる……ッ♡ 奥まで痺れが走ってくる♡♡）

こりい♡♡ ぐりっ♡ ぐりぐり♡ こりぐりこりぐり♡

「あっ♡ あっ♡ んうう……ッ♡♡ やっ……もう…  
…っ♡♡」

孝一郎さんの動きが少しずつ速くなる。速くなったと思えば急に遅くなる。遅くなった瞬間に追いかけるように腰が動いてしまって、余計に恥ずかしくなる。

（意地悪……ッ♡ 遅くするたびに腰が動いちゃうのわかってやってる……ッ♡♡）

「ひい……ッ♡ お、おねがい……ッ♡♡ もっと…  
…ッ♡」

「もっと、なんだ」

「ん……ッ♡ もっと、速く……ッ♡♡」

「お前は命令できる立場じゃないはずなんだがな」

淡々とした声でそう言いながらも、指の動きが一

気に加速した。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡ こりこりこりこり  
こり♡

ぐりぐりぐりぐり♡ くちゅくちゅくちゅ♡

「あぁ♡ あぁ♡♡ ひいん……♡ ん♡ ん  
♡ んんん♡♡」

視界がチカチカする。脚の力が完全に抜けて、テーブルにしがみつくようにして体を支えた。腰がカクカクと揺れるのが止まらない。

（くる……♡♡ くるくる……♡ もうイきそう  
……♡！！♡♡）

「イ……く♡♡ イっちゃいます……♡♡ 孝一  
郎さん……っ！！♡♡」

「イけ」

一言だった。それだけだった。でも、その声で全部が決壊した。

ぐりいいいッ♡

「ン……ッ♡♡ んぁぁぁぁぁぁぁ……ッ！！♡  
♡♡」

ガクガクガクガクガクッ♡

全身が大きく痙攣して、膝が崩れ落ちそうになった。クリトリスがじんじんと脈打って、余韻がなかなか引かない。腰がひとりでに前後して、どこにも力が入らない。

（イっ……た……ッ♡♡ また……また孝一郎さんに……ッ♡♡♡）

荒い呼吸のまま、テーブルに額をつけるようにして倒れ込んだ。体がまだビクビクと震えている。

孝一郎さんは指を離して、静かに立ち上がった。

「まだ終わりじゃないぞ」



低い声が、頭の上から落ちてくる。  
今日も、まだ始まったばかりだった。

\* \* \* \* \*

夕方の事務所は静かだった。組員たちが集まって打ち合わせをしているのは奥の広間で、廊下に出てくる者はほとんどいない。給仕係として茶を運ぶよう言いつけられた私は、トレーを持ったまま廊下に立ち、軽く息を整えようとしていた。

——これより二時間前のことだ。

別室に呼ばれた。孝一郎さんがいつもの無表情で立っていた。テーブルの上になにも置かれていなかったが、それがかえって不穏だった。

「今日、広間で茶出しの仕事してもらう」

「はい」

「その前に、ちょっとやることがある」

「やること、ですか……？」

「こっち来い」

そう言われ近づくと、孝一郎さんは私を机に手をつかせて後ろから構えた。

「んんん！？♡♡」

そしてスカートを捲ってショーツをズラして、ためらいもなく、おまんこを舐め始めた。低い天井、静かな部屋、廊下からは組員の声が遠く聞こえてくる。

れろれろ♡れろれろ♡れろれろ♡れろり♡

「う、ふうう♡♡ う、あ……ん♡ んー、ん～～♡♡」

「濡れすぎだ。いくら舐めてもキリがないな」

「ん、ああん♡♡ ごめんなさい♡♡」

泣き声になってしまっているのが自分でもわかる。スカートも下着も中途半端な位置まで下ろされて、尻を突き出す格好のまま後ろから舐められ続けている。ぐちゅぐちゅ♡と音が立つのは唾液なのか愛液なのかわからないほど混ざり合っていた。

「ひいい♡♡ ひい……ん♡ はぁん♡♡」

「本当に正直な体してる。なかなか治らないな」

「んあぁっ♡♡ あん、はぁん♡♡♡」

舐められ続けた場所は愛液をダラダラと垂らして、太ももまで濡らしてしまっている。肉厚の舌で割れ目をくすぐられるたびに、奥が疼いて仕方ない。これ以上されたくない。頭ではそう思っているのに、体は快楽を欲してヒクヒクと反応してしまう。

「これ、付けとけ」

そう言いながら、孝一郎さんは何かをポケットから取り出す。私が振り向いて確認するより速く、ぬ

るり♡と挿れてしまった。

「んううう！！♡♡」

シリコン製の、遠隔式のバイブだった。装着したあとは手際よくショーツを元に戻して、スカートも直された。

「広間で仕事してる間、ずっとつけてろ。どんなに気持ちよくなってもイくなよ」

「ん、う、うそお♡♡」

「なんだ？ もっと大きいバイブに変えられたいか？」

「い、いえ……♡」

「ならできるな？」

「はい……ッ♡」

孝一郎さんは薄く笑って、耳元で低く言った。

「勝手に抜いたらどうなるか、わかってるよな」

そして孝一郎さんの言いつけ通り、私はバイブを装着したまま広間に茶を運んでいる。組員たちの前で給仕をしながら、遠隔操作されるのをただ待っていた。孝一郎さんはどこかで待機しながら、コンローラーを握っているのだろう。

ブブブッ♡ ブブブブブッ♡

「ん……ッ、く……っ♡ はーっ♡ はーっ♡」

奥でバイブが震えて、私を弄ぶ。深呼吸を繰り返して快感を逃そうとしても、バイブは無慈悲に振動を続けて追い詰めてくる。

(だめ♡ 我慢しないといけないのに声が出ちゃいそう……ッ♡ 組員の人たちに気付かれたらどうなるかわからないのにっ♡♡)

気を逸らそうとすればするほど、逆にそこへ意識が集中してしまう。さっき孝一郎さんにクンニされていた時も、浅いところだけ舌で掻き混ぜられて決

定的な快樂は与えてもらえなかった。トロトロに蕩けさせられた状態のまま仕事に送り出されてしまったのだ。

（奥がずっとウズウズしてる♡ 敏感になってるせいでバイブを締め付けちゃうう……♡）

バイブの振動は弱すぎず強すぎず、甘い責め苦で私を追い詰めてくる。イきそうでイケない。一番きつい状態がずっと続いている。なんとかトレーを持って立ってはいるが、思考回路がまともに働かなくて、とにかく早くこの時間が終わって欲しいとそれしか考えられなくなっていた。

（イきたいなんて思っていないもん♡♡ バイブが落ちないように締め付けてるだけで……ッ♡ おまんこ、ジンジンして熱くて……えっちなおつゆが溢れちゃうの♡）

「んっ♡♡ んうう……♡ ん……あ♡」

きゅううッ♡

膣を締めると、奥でバイブの角度が変わってイイところに当たる。うっかり声を上げそうになって、寸前で唇を噛みしめる。

(こ、これヤバ♡♡ このまま続いたらイけそう♡  
気持ちいいところがぶるぶるしてるぅ♡♡)

トレーを持ったまま、私は股をグッショリと濡らしてバイブに意識を集中させていた。この寸止め状態から早く解放されたかった。

「し、失礼します……」

広間に入ると、組員が六人いた。

上座に近い席から順に、年かさの男が腰を落ち着けている。スーツ姿の者もいれば、シャツ一枚の者もいた。煙草の煙と、茶の香りが混ざって漂っている。全員が私に一瞥をしたが、すぐ視線を戻した。孝一郎さんの「女」だとわかっているから、それ以

上は踏み込まない。

「お茶、失礼します」

声が震えないよう、ゆっくりと息を吐いた。トレイを水平に保ちながら、端の席から順に茶を置いていく。

「ありがとうな」

ぼそりと言ったのは、四十代くらいの男だった。顔に傷がある。穏やかな声だったが、目は笑っていない。私はただ「いいえ」と頭を下げた。

ブブブッ♡

(っ……！♡♡)

バィブが強く奥へ当たった瞬間、手が止まりそうになった。茶碗がわずかに揺れて、隣の男が顔を上げた。



「どうした」

「いえ、すみませんッ……！」

平静を装って、次の席へ移る。内側がじわりと熱くなる。バイブは弱い振動のまま、ただそこにある。

(落ち着いて……声を出したら終わり……ッ♡)

「おい、例の件どうなった」

部屋の奥で誰かが口を開く。打ち合わせが再開したらしい。私への関心は薄れて、全員の視線が一点に集まった。

「向こうが折れた。明日には話がつく」

「そうか。頭には報告したのか」

「今夜する予定だ」

一瞬、沈黙があった。誰かが湯呑みを置く音がした。私はそのタイミングで次の席へ進もうとして、足が止まった。バイブの振動が、ちょうどそのとき

少し強くなったのだ。奥歯を噛みしめて、息だけをゆっくり吐く。誰も見ていない。誰も気づいていない。それだけを繰り返しながら、次の席へ一歩踏み出した。

(ゆっくり、ゆっくり歩けば、大丈夫……ッ♡♡)

会話が続く。私はそれを背中で聞きながら、次の席へ進む。茶碗を置くたびに、腰の奥で振動を意識してしまう。弱くても、敏感になりすぎた体には鮮明に伝わってくる。

ブブブブ♡

(やだ……また強くなった……ッ♡)

「これ、どこの茶だ」

突然声をかけられた。細面の男が茶碗を持ち上げて、じっと見ている。

「ええと……。も、申し訳ありません、聞いて、み

ます……ッ」

「……ならいい」

男はそれだけ言って、視線を戻した。呼び止められた数秒間、私は息を止めていた。話しかけられた瞬間だけは、体の感覚を遠ざけることができる。でも会話が終わると、快感が一気に戻ってきた。

(ひどい……孝一郎さん、わかってやってる……ッ  
♡ 会話のタイミングで振動を変えてる……ッ♡♡)

廊下に近い席の男が立ち上がった。背が高くて、肩が広い。私のそばを通り過ぎながら、一瞬目が合った。

「ああ、ご苦労さん」

会釈して通り過ぎる。でもその数秒、距離が近かった分、気づかれなかったかと心臓が縮んだ。顔に出ていなかったか。足が震えていなかったか。声が

漏れていなかったか。

(大丈夫……落ち着いて……ッ♡)

トレーが空になった。端の壁際に下がって、茶が減ったら注ぎ足すよう言いつけられている。周りから一步離れたところに座り、私はただ振動に耐えていた。

組員たちの話は続いている。金の話、縄張りの話、どこかの名前。内容は耳に入らない。ただ、声だけがある。私がここにいることを誰も意識していない。普通の給仕係として扱われている。

(この人たち、私のこと全然知らないんだ……ッ♡  
スカートの中でバイブが動いてるの、誰も気づいてない……ッ♡♡)

その事実を意識した瞬間、体の奥が熱くなった。

(気づかれたら、どうなる……ッ♡でも……気づ

かれないまま、ここでずっとこうしてるのも……なんで、こんなに……ッ♡♡)

ブブブブッ♡♡

振動が急に強くなった。息を吞んで、口を一文字に結ぶ。腰に力を入れて、その場で静止する。顔だけは前を向いたまま。組員たちは誰も気にしていない。話が続いている。煙草の煙が流れていく。

(だ、だめ……ッ♡ 声が出そう……ッ♡♡ 絶対に、出しちゃ、だめ……ッ♡♡ でも、ああっ♡ イイ……ッ 振動が響いちゃう♡♡ 孝一郎さんが私のことイカせようとしてる♡♡)

奥の振動が激しくなって、全身が震えた。散々焦らされていたせいで、膣の反応がすごい。うねうねとバイブに絡みついて、絶頂感が押し寄せてくる。

(ゾッ♡♡ あ……くる♡♡ すごいくる♡ おまんこの奥までぶるぶるしてる♡♡)

ぎゅっと目を閉じて意識を集中させると、より振動を強く感じる。唇を引き結んで膣に力を込めて、きゅうぅッとバイブを締め付ける。機械的な振動は的確で、気持ちいいところを刺激し続けてくれる。

(すごい♡ こんな小っちゃいバイブなのにナカで暴れてりゅ♡♡ 廊下でイッちゃう♡ 孝一郎さんに言いつけられた仕事をしている間に、おまんこぶるぶるして気持ちよくなっちゃうぅ！！♡♡)

「ん、ッ~~~~~！！♡♡♡」

内腿の筋肉が引き攣って、膝がガクガクと震える。壁が支えてくれなかったら崩れ落ちていたかもしれない。頭がふわふわして、なにも考えられなくなる。余韻に浸りながら、ほうっと恍惚のため息が出てしまう。

(イッちゃった……♡ 孝一郎さんにイッちゃ駄目って言われたのに♡ でも、我慢できなかったんだもん……♡♡)

寸止め地獄から解放されて、ほっと一息ついたのも一瞬だった。バイブがおかしな動きを見せ始める。

実はこのバイブ、二点同時責めができる機能つきだったのだ。膣から出た部分が股に添うようなかたちになっているのは、装着したまま下着を履くためだけではない。クリトリスが当たる部分が凹んでいるのも、そのためだけではない。その小さく凶悪な機械は、奥で振動しながらクリトリスを吸引し始めた。

「ゾッ♡♡♡」

イッたばかりの膣内を振動で責め立てて、ピンピンに勃起したクリトリスを容赦なく吸い上げてくる。

(やばい、やばい♡♡ 止まって♡ 止まってよぉ♡♡ なにコレ！？ クリトリスまで苛めてくるなんて聞いてない♡)

奥の振動はさらに激しくなって、吸引力も強くな

る。それだけじゃない。パイプが伸縮し始めた。

(う、うそ……♡奥でズコズコしてる♡♡パイプがゴシゴシ擦ってくる♡♡)

座っているのがやっとだ。壁にしがみついて、崩れ落ちないように自分を支える。廊下の奥から組員たちの話し声が聞こえてくる。それがかえって緊張感を煽って、感覚が鋭くなる気がした。パイプは止まらず、様々な動きで私を翻弄する。クリトリスを吸われて、有り得ないほど感じてしまっているのに、うねる膣内を疑似ピストンでこれでもかと責め立てられる。振動しながら膣壁を擦られて、甘イきが止まらない。

(やだやだ♡私、パイプとセックスしちゃってるよお♡♡廊下でセックスしてる♡組員たちのすぐそばで本気イきしちゃうのお……♡♡)

無意識で腰をヘコヘコと揺らして疑似セックスに



溺れる。孝一郎さんのモノに比べてかなり小ぶりなのに、じわじわと追い詰めてくる感じがたまらない。

「ん、んーッ♡ ふ……♡ ふううッ♡」

声は何とか絞って抑えているけれど、吐き出す息はすっかり色を帯びていた。

(ゴシゴシ気持ちいい♡♡ おまんこ濡れすぎて、ショーツがぐちゃぐちゃ……♡ やば♡ 水音聞こえちゃったらどうしよう？♡♡ クリ吸うのも止まらないしジンジン熱いよお♡ イく……ッイくイく♡ イッちゃう♡♡ また、すごいイき方しちゃう……ッ♡♡)

目を開けているのになにも見えない。脳が働いていない。靄がかかったように頭まで真っ白でなにも考えられない。その時、ぐっと腕を引かれた。目の前には、孝一郎さんが立っていた。

「終わった。出るぞ」

説明はない。それだけで、腕を掴まれた。

「……ッ♡ あ、ちょ……♡♡」

逆らえる体じゃなかった。膝がまともに動かない。引かれるまま、足を引きずるようにして廊下を進む。歩いているというより、孝一郎さんの腕に体重を預けているだけだった。

（待って……まだ、ナカで動いてる……ッ♡ 歩くたびに角度が変わって……ッ♡♡）

バイブはまだ入ったままだ。一步踏み出すたびに体の奥で存在を主張してくる。ショーツがぐちゃぐちゃなのも、太ももが濡れているのも、全部孝一郎さんにしか見えない場所の話で。

「ちゃんと歩け」

「……っあ、はい……ッ♡」

声が掠れた。孝一郎さんはそれ以上なにも言わなかった。ただ、腕を引く力は緩めない。

広間の前を通り過ぎる時、背中に無数の視線を感じた。

振り返る余裕なんてない。

乱れた息で、頬が熱いまま、孝一郎さんに腕を引かれて廊下を歩く私の姿が、どう見えていたんだろうか。でも、その考えもすぐに消えていく。今はナカに入ったバイブのことしか考えられなかった。

「ちゃんと我慢できたか？」

気づけば、いつもの部屋まで連れて来られていた。

いつもの部屋の奥で孝一郎さんはいつも通りの表情で立っていた。私がどんな様子だったか、手に取るようにわかっているのだろう。口をつぐんでなにも言わない私に更に問いかける。

「我慢できたか？」

「……………は、はい…………♡♡」

「じゃあ確認する」

私の嘘などお見通しだ。孝一郎さんは私に近づいて全身を視線で舐め回す。そして低い声で言った。

「スカート捲って全部見せろ」

「…………♡」

拒否権はない。涙を浮かべながら震える手で自分のスカートを捲り上げる。孝一郎さんは無言で鼻を鳴らすと、床に膝をついて私の股間に顔を近づける。

「足、開け」

「うぁっ…………♡」

言われるがままに足を開く。

孝一郎さんの言葉はまるで暗示のようだ。なにも考えられなくて従ってしまう。ぐしょ濡れのショー

ツをズラして、にゆるりとバイブを引き抜いた。ドロドロに濡れたバイブが透明な糸を引いて床に落とされた。

「ドロドロじゃないか。嘘ついたろ。いきまくったんだろ。……ほら」

「んあッ♡♡」

バイブが抜かれて空洞になったそこに、孝一郎さんが指を突っ込んでくる。中指と薬指を添えて二本奥まで埋め込むと、膣がキュンキュンと喜んでしまう。

「やっぱりな。お前は我慢できなかったんだろう」

「んっ♡ あ……ッ♡」

「あそこで何回イったんだ？」

熱い粘膜を味わいながら、ゆっくりと指が動く。奥で鉤状に曲げて膣壁を撫でられると、立ってられないほど感じてしまう。前のめりになって、咄嗟

に孝一郎さんの肩に手をついた。自分を追い詰めている男に縋りついて、ナカを好き勝手に掻き混ぜられている。

ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡  
ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡

「ん……ッく♡ うう♡ んああ♡」

「喜んでるな」

「ふあっ♡ あ、ああ……っ♡♡」

「このまま何回でもイくのか？」

「や、あ……あっ♡ あん、ふああっ♡♡」

(イッたのバレてる……♡ ぐちゃぐちゃのおまんこ、孝一郎さんにバレてる♡ そんなに擦ったらまたイッちゃうのにい♡♡)

ねっとりとした指遣いで巧みに責められる。小動物みたいにあふると震えながら堪えているのに、私の体は悲しいほど孝一郎さんに馴らされてしまっていた。指を抜こうとするたびに、キュンキュンと締め付けて膣肉が蠢く。

「んあっ♡♡」

にゅぽんっと指が引き抜かれて、栓を失った膣口から透明の粘液が零れ落ちる。貪欲なそこが涎を垂らしているみたいだ。

孝一郎さんが顔を上げて私を見る。目が合う。

「あっ♡ あぁ……ッ！♡」

孝一郎さんが私をソファの上に押し倒した。背もたれに上半身を預けるような格好になる。脚を広げさせられて、ぐったりした体がそのまま固定される。

「動くなよ」

今日は徹底的に玩具で追い詰めるつもりらしい。孝一郎さんは私の真正面にしゃがみ込んで、ディルドを手にとった。そのまま私の痴態を間近から眺めながら、手首だけを動かすつもりらしい。

私は体をソファに押しつけられたまま、おまんこ

を全部晒した格好でディルドを待つ。

(全部、近くから見られてる……ッ♡逃げ場もない♡♡)

孝一郎さんはすぐには入れなかった。ディルドの先端を花びらに沿わせて、ゆっくりと上下になぞり始める。入口に押し当てては離して、また押し当てる。焦らすみたいに、何度も何度も。

ぬるっ♡ぬるっ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡

「んあ……♡あっ……♡そ、それ……ッ♡♡」  
(入れてくれない……ッ♡入口だけぐりぐりされてる……ッ♡ずるい♡♡)  
「濡れすぎだろ」

入口から溢れた愛液がディルドを伝って、孝一郎さんの指まで濡らしているのがわかる。それを見て、孝一郎さんがゆっくりと先端だけを押し込んだ。

ぬぷぷっ♡



「あ……ッ♡♡ は、入って……ッ♡」

先端だけ。それだけで止まる。入口が広げられて、ヒダが絡みつくのがわかる。

「ん、ふうう……っ♡」

ぬぷぬぷ♡ と先端だけを出し入れされる。浅いところだけを繰り返されて、奥が物足りなくて疼いてくる。

（やだ……浅いところばかり……ッ♡ もっと奥まで来てほしいって体が言ってる♡♡）

腰が勝手に前に出る。もっと入れてほしいと訴えるみたいに。孝一郎さんはそれを見て、動きを遅くした。意地が悪い。

にゅぷっ♡ にゅぷっ♡ ぬちゅ♡ ぬちゅ♡ ぬぷ  
ぬぷ♡

「もっと欲しいか」

「ん……ッ♡ あっ、あっ♡ はあん♡♡ もっと……ッ♡」

「もっとなんだ」

「あ……っ！！♡♡ んううッ♡♡」

言えなかった。でも体が正直に腰を押しつけていく。孝一郎さんはゆっくりと、少しずつ深く入れてくる。半分。三分の二。その度に止まって、私の反応を確かめる。

ぐちゅっ♡ にゅぷっ♡ ぐちゅ♡

「はっ……♡ ふあ……ッ♡ んうう……ッ♡♡」

（ゆっくり来るの、ダメ……ッ♡ どこにいるのかぜんぶわかっちゃう♡♡ ナカが広げられてく感じ、変なのに気持ちいい♡♡）

バイブがゆっくりと、最後まで押し込まれる。

「ひう……ッ♡♡ 奥まで……ッ♡♡」

満たされた感覚に、膣がきゅうっと締まる。孝一郎さんはそのまま少し待って、それから動き始めた。

ぐちゅっ♡ ぐちゅっ♡ じゅぽっ♡ じゅぽっ♡  
ぐちゅぐちゅ♡ じゅぽじゅぽ♡

「はっ……♡ ふあッ♡♡ んうう……ッ♡♡」  
（自分ではなにもできない……ッ♡ 孝一郎さんが動かすたびに、気持ちいいところに当たって……ッ♡♡ 逃げ方もわからないし、ソファに押しつけられてるから腰も引けない♡♡）

膣内を往復するたびに汚らしい水音が立って、そのたびに頬が燃えるように熱くなる。孝一郎さんはディルドを抜き差しする角度を少しずつ変えながら、弱いところを探してくる。的確すぎて、怖い。

にゅぐっ♡ にゅぐっ♡ ぐりっ♡ ぐりぐり♡ じゅぽっ♡ じゅぽっ♡

「あっ♡ やぁ♡♡ そこッ♡ そこぐりぐりしちゃだめええッ♡♡」

「ここ好きだな」

執拗に擦り上げてくる。指で探すような動かし方から、ピンポイントで責める動かし方に変わった。

ぐりっ♡ ぐりぐりぐり♡ にゅぐっ♡ にゅぐにゅぐ♡ ぐちゅぐちゅぐちゅ♡

「あっ♡ やっ♡ そこばかり……ッ♡♡ んッ♡ んッ♡♡」

（奥が熱い……ッ♡ ジンジンして、おかしくなりそう……ッ♡ 弱いところを、ずっとゴシゴシして……♡♡）

「ん、ん……あッ♡ はあっ♡♡」

「こっちも触ってやる」

片方の手が伸びてきて、乳首を摘まむ。

最初の頃はそうではなかったはずなのに、毎日のように可愛がられているうちにいやらしい形に育ってしまっていた。摘まみやすくなったそこを、孝一郎さんの指先が弄ぶ。ツンとたった乳首をこりこり

♡と摘まむと、どうしようもなく気持ちよくなってしまう。切なげに眉を寄せて吐息が零れる。

「ああっ♡ あん、ああん♡♡ いやぁ……ッ♡」  
（おっぱい気持ちいいよお♡♡ 乳首苛められるとおまんこも喜んじゃうの、なんで……ッ♡♡ 私、こんな体じゃなかったのに……♡♡）

ソファに体を預けたまま、腰だけが孝一郎さんの動きに合わせて浮いてしまう。片方の手はディルドを操りながら、もう片方は乳首を離さない。根元を摘んできゅっと引っ張られると、体の芯からじわじわと熱が湧いてくる。

むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅむにゅ♡  
こりっ♡ こりっ♡ こりこりこり♡ きゅうう～♡  
くにくに♡ くにくにくに♡

「ふぁ……ッ♡ やっ、引っ張らないで……ッ♡♡  
おっぱい、まで、変な感じ……ッ♡♡」

孝一郎さんは私の痴態を間近から凝視しながら、指先を器用に動かし続ける。ディルドの動きと乳首の刺激が重なって、どちらに集中すればいいかわからなくなってくる。

くにくにくにくに♡ こりこりこりこり♡ こりこりこりこり♡

にゅぐにゅぐにゅぐ♡ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡

「んああっ♡♡♡」

(も、だめ♡ 自分ではなにもできないのに体だけが反応してしまう♡ はあん♡ 乳首捏ねられると子宮にクるぅ♡♡ 脚がガクガクして力が入らないよお♡♡)

「ゾッ！！♡♡ んあッ♡」

(おまんこキュンキュンしてるッ♡ 乳首でイッちゃう♡ だめ♡ 我慢できない……ッ！ ディルド締め付けちゃう♡♡ おまんこの奥っ、キュンキュン止まらない……♡ おっぱいでイかされちゃうぅ♡♡♡)

「ジ〜〜〜〜〜ッ！！！！♡♡♡」

乳首をぎゅうっ♡と捻り潰された衝撃で、大きく仰け反りながら絶頂する。全身の筋肉が引き攣って、ぶるぶると震える。絶頂痙攣がようやく治まった瞬間、腰の力が完全に抜けた。孝一郎さんがそのタイミングを見計らって、ディルドを一気に奥まで押し込んだ。

「あんッ！！！！♡♡♡」

ガクガクガクガクガク♡

「……あひい♡♡」

奥への衝撃がダメ押しとなって、椅子の上で丸いお尻をビクビクと震わせた。

（や、やば……♡ またイッちゃった♡♡ 奥、思いつきり突かれるの好き……♡ すご♡♡ 全身にビリ

ビリって電気が走ったみたいで♡ おまんこ壊れちゃうかと思った♡)

奥まで届いた感触に、膣がぎゅううっと締め付ける。孝一郎さんはそのまま引き抜かず、鉤状に角度を変えて膣壁の前側を押し当ててくる。

ぐりっ♡ ぐりぐり♡ ぐりぐりぐり♡

「ひう……ッ♡♡ そ、そこ……っ♡♡ 変なところ…  
…ッ♡♡」

(ナカの……ざらざらしてるところ……ッ♡ そこを  
ぐりぐりされると、おかしい感じするのに……ッ♡  
♡)

じわじわと下腹が熱くなる。絶頂したばかりで敏感になっている体に、その刺激は強すぎた。腰が逃げようとして、でも逃げると余計に当たる。

「や……ッ♡ やだ……ッ♡♡ なんか……変な感じ



……ッ♡」

「我慢するなよ」

声が落ちてくる。ディルドの動きが速くなった。  
同じ場所を、執拗に、ぐりぐりと擦り続ける。

ぐりぐりぐりぐり♡ にゅぐにゅぐにゅぐ♡ ぐち  
ゅぐちゅぐちゅ♡♡

「あっ♡ あっ♡ やっ……ふああ……ッ♡♡ なんか、  
なんかくるう……ッ♡♡」

（おかしい……ッ♡ 今までと違う感じ……ッ♡ 下  
腹がぐーっと締まってきて……ッ♡♡ 出ちゃいそ  
うな感じがする……ッ♡♡♡）

「や……ッ♡ やだッ♡ 出ちゃいそう……ッ♡ 変な  
の出ちゃいそうで……ッ♡♡」

「出せ」

「やっ♡♡ やだあっ♡ だって、こんなの……っ！  
！♡♡」

ぐりぐりぐりぐりぐり♡♡ にゆぐにゆぐにゆぐ  
にゆぐ♡ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ♡♡♡

「あッ♡ あッ♡ んぁぁぁ……ッ♡♡ やっ♡ やだ  
やだやだ♡♡ 変なの……出ちゃ……ッ！！♡♡」  
（くる……ッ♡♡ くるくるくる……ッ♡ 止まらない、  
止められない……ッ♡♡♡ おまんこの奥が弾  
けそうで……ッ♡♡♡）

下腹に全神経が集中する。締め付けが止まらない。  
腰がひとりでに持ち上がって、ディルドをもっと深く  
啜え込もうとする。

「ひゃうッ♡♡♡ あッ♡ んぁぁぁぁぁ……っ♡♡  
も、もう……っ♡♡♡」

ぐりいいいッ♡♡♡

「あぁあッ！！！！♡♡♡」

ガクガクガクッ♡ ぷしゃあああッ♡

堰を切ったように、勢いよく潮が噴き出した。ソファを濡らして、孝一郎さんの手まで濡らして、それでも止まらない。全身が大きく痙攣して、声にならない声が喉から漏れる。

(や、やばっ……♡♡♡ 出てる……出てるのに止まらない……ッ♡ なにこれ……ッ♡♡♡)

「ん……ッ♡ あ……♡♡ ま、まだ……だめ……ッ♡♡」

余韻がなかなか引かない。腰がびくんびくんと跳ねるたびに、また少し溢れてくる。孝一郎さんがゆっくりとディルドを引き抜くと、にゅぽんっ♡と音がして、最後の一滴が滴り落ちた。

(もう……なにもわからない……ッ♡♡ おまんこ、ぜんぶ出し切っちゃった……♡♡♡)

椅子にぐったりと体を預けたまま、荒い呼吸が続

く。孝一郎さんは濡れた手を無造作に見下ろして、静かに言った。

「潮吹きは初めてだったな」

(しお、ふき……♡♡)

ぼんやりしていると、孝一郎さんが立ち上がる気配がした。引き出しを開ける音。それから、ソファの隣に腰を下ろす感触。

乾いたタオルが、内腿に触れた。

(もう、今日は終わりなんだ……ッ♡)

荒い呼吸のまま、半分目を閉じていた。孝一郎さんは無言で、丁寧に拭いていく。太ももから、膝の裏まで。潮でぐっしょりと濡れた場所を、端から端まで。

こうなると、今日はもう終わりの合図でもあった。

「……挿れないんですか」

声が出た。自分でも驚いた。

孝一郎さんが手を止める。少し間があった。

「今日はこれで終わりだ」

「……でも、あの、借金返すのに、……」

「俺が挿れなくても、借金返済にはなっている」

低い声だった。感情がなかった。でも、その言い方が全部だった。

「なんだ。欲しいのか？」

「……ッ！！♡♡」

（欲しがってるって、思われてる……ッ♡でも…  
…否定できない）

頬が熱くなる。さっきまで散々乱れておいて、今さら羞恥心もないかもしれないけれど。それでも、「欲しがっている」と言われるとうまく返せなかった。

「……べつに、欲しがってる、わけじゃ……」

「そうか」

孝一郎さんはそれだけ言って、タオルを畳んだ。こちらを見ていない。ただ、立ち上がって上着を手取る。

（あっさりしてる……ッ。もうちょっとくらい、引き止めてくれたっていいのに……）

「早く服を着ろ」

床に落ちていたシャツを、ソファの上に放られた。

「……はい」

手が震えながらも袖を通す。孝一郎さんはその間も特に手伝うでもなく、煙草を一本取り出して火をつけた。細い煙が天井に向かっていく。

（今日も、挿れてもらえなかった……。玩具と指だけで、ぜんぶ終わった……）

残念だと思っている自分に、気づかないふりをした。

「明日もするからな」

孝一郎さんが煙草を灰皿に置きながら言う。

「……はい」

(明日も、挿れてくれないのかな……)

\* \* \* \* \*

ある昼下がり、孝一郎さんから呼び出された。

「今日は外に出るぞ」

「……どこに」

「着けばわかる」

言われるがままについていくと、地下駐車場に黒い車が一台停まっていた。いつも組員が二、三人いるのに、今日は孝一郎さん一人だった。

(二人きり……?)

後部座席に乗り込むと、孝一郎さんが自分でハンドルを握った。組員に運転させないのは珍しい。事務所ではいつも誰かを従えているから、一人で動くのは珍しかった。それだけで、今日が普段と違うとわかった。

車が走り出しても、孝一郎さんはなにも言わなかった。行き先も、目的も、なにも。ミラー越しに目が合いそうになって、慌てて視線を外した。助手席は空のままだった。二人きりだという事実が、妙に意識される。煙草の煙がうっすら漂っていて、エンジン音だけが静かに続いていた。



(どこ、行くんだろ……?)

窓の外を眺めても、どこを走っているのかわからない。街並みがだんだん薄くなって、やがて緑が増えてきた。山道だ。カーブが続いて、木々が車窓を流れていく。日差しが葉の間から差し込んで、光がちかちかする。

四十分ほど走ったところで、車が止まった。

木々に囲まれた一軒の建物だった。外壁は白い漆喰で、ところどころ蔦が絡まっている。石畳のアプローチが玄関まで続いていて、両側に低木が整えられていた。山の中にあるのに、手入れが行き届いている。

「降りろ」

言われるままに降りると、昼の山の空気が肌に触れた。静かだった。遠くで鳥が鳴いている。街の音がなにもない。

（別荘だ……。これって、孝一郎さんの別荘、なのかな……？）

車から降りた孝一郎さんが、扉を開けて入った。続いて中に入ると、外とは違うひんやりした空気があった。エアコンが効いている。玄関ホールは天井が高く、石のタイル張りだった。正面の階段は幅が広くて、木の手すりが光を受けて艶めいている。

「こっちの部屋だ」

通された部屋は二階だった。

窓の大きな部屋で、木々を透かした昼の光が、淡くカーテン越しに差し込んでいる。床は無垢材で、踏むたびに少し沈む感じがする。壁際には背の高い本棚が並んでいて、その奥にはベッドがあった。ダブルよりも大きい。ヘッドボードが低くて、シーツは白い。窓からの光を受けて、静かに佇んでいた。

（いいホテルよりも、ずっと豪華……）

「座れ」

ベッドを顎で示された。腰を下ろすと、柔らかなシーツの感触がした。孝一郎さんは立ったまま、窓の外を少し眺めてから、こちらに向き直った。

「今日は時間がある」

「……時間が、あるってどういうことですか？」

「邪魔も入らない」

一歩、近づいてくる。もう一歩。私は立ち上がろうとして、でも間に合わなかった。肩に手が触れて、そのままベッドの上に押し戻される。力は強くない。でも、逆らう気が起きなかった。

背中がベッドに沈む。

孝一郎さんが覆い被さってくる。煙草と、かすかな香の匂い。昼の光の中で見る孝一郎さんの顔は、いつもよりはっきりと見えた。

「目、閉じてろ」

孝一郎さんが言った。

「……え」

「閉じろ」

言われた通り、おそろおそろ目を閉じると、少し間があった。なにかが顔に触れる。柔らかい布だった。目の上に当てられて、後頭部で結ばれる。

（目隠し……ッ♡）

視界が消えた。暗い。さっきまで見えていた昼の光も、木々のシルエットも、なにもわからない。孝一郎さんがどこにいるのか、どんな顔をしているのか、全部わからない。

「こ、孝一郎さん、どこ……ッ？」

答えはなかった。気配だけがある。ベッドの軋む音がして、近くにいとわかる。でも、どこから触

れてくるのかわからない。

静寂の中で、自分の呼吸だけが聞こえる。鳥の声が遠くから聞こえてくる。山の中の静けさが、余計に神経を研ぎ澄ませる。

(近くにいるのかな……。それとも、もう離れてる……？)

確かめたくて体を起こそうとした瞬間、肩に手が置かれた。

「動くな」

「……っ♡ は、はい……」

孝一郎さんの手がシャツの裾をつまんだ。ゆっくりと、引き上げられる。

「あ……っ♡」

脱がされるとわかって、目が見えないと腕の上

げ方がわからない。孝一郎さんが無言で腕を持って、袖を抜かせてくれた。シャツが取り除かれて、上半身に空気が触れる。

（見えないまま、脱がされてる。なんか、すごく恥ずかしい……）

次に、背中に手が回った。ブラのホックに指がかかる。慣れた手つきで、ぱちりと外れた。

「あ……ッ♡」

肩から肩紐がずり落ちて、するりと引き抜かれた。おっぱいに昼の空気が直接触れた。

（おっぱい、全部、見られてる……♡ 私は見えないのに、孝一郎さんには全部見えてる……♡♡）

その非対称さが、じわりと体に響いた。

見えない分、見られているという意識だけが強く

なる。どんな顔で見ているのか、なにを考えているのか、全部わからないまま、ただ晒されていた。

（これって……目が見えないと、余計に感じやすくなる気がする……。次になにが来るかわからないから、体中がずっと緊張しちゃう……♡♡）

見えていたときより、ずっと敏感だった。唇が動くたびに、次はどこかと体中が緊張する。

肩に触れて、胸の上をゆっくりと撫でて、また止まる。

「あ……ッ♡ ん……ッ♡♡」

大きな手のひらが、両方のおっぱいをゆっくりと包んだ。

むにゅ♡ むにゅ♡ むにゅむにゅ♡

「んっ♡ んっ♡ ふあ……ッ♡♡」

揉みしだくよりも、やわらかく形を確かめる動かし方だった。指が沈むたびに、体の奥がじわりと熱を持つ。見えないぶん、手の温度がいつもより直接伝わってくる気がした。

(大きい手で、ゆっくり……ッ♡ いつもより、丁寧な気がする……ッ♡♡)

むにゅむにゅむにゅ♡ もみもみ♡ もみもみもみ♡

「あっ♡ あっ♡ ん……や……っ♡♡」

指先が乳首の周囲をくるくると回り始める。触れそうで触れない。ギリギリのところで止まって、また外側へ逃げる。

くるくる♡ くるくるくる♡ くるくる♡

「んッ♡ あっ♡♡ やっ、そこッ♡」

(乳首♡♡ 早く触れてよ……ッ♡ そこばかりぐ



るぐるして……ッ♡ もどかしい♡♡)

「そんな風に腰を揺らして。どこに触ってほしいんだ？」

「……んう……乳首……ッ♡♡」

言わされた、と思う前に、ようやく乳首の先端に指が触れる。

こりっ♡

「ひあ……ッ♡♡」

軽く触れただけなのに、全身がびくんと跳ねた。見えないせいで、どこから刺激が来るかわからなくて、体が過剰に反応してしまう。

孝一郎さんはそれを確認するように、また軽く。

こりっ♡ こりっ♡

「あっ♡ や……っ♡♡ 見えないと、余計に……ッ♡♡」

「余計になんだ」

「ん……ッ♡ 余計に、感じる……ッ♡♡」

もう硬くなっている乳首を摘まんで、転がされる。

くりくりくり♡ こりこりこり♡ くにくにくに♡

「ふああ……ッ♡ んッ♡ んッ♡♡ やっ、そんなに……ッ♡♡」

（乳首だけで、奥が疼いてくる……ッ♡♡ おまんこの方がじわじわしてきた……ッ♡♡）

人差し指の腹が、乳首の先端をそっと押した。

ぐにっ♡

「ひっ……♡♡」

乳首を押してから、くるりと回される。先端だけをぐるぐると圧をかけながら転がすような動きだった。

ぐりぐり♡ ぐりぐりぐり♡

「んあ……ッ♡ やっ♡♡」

片方が終わると、もう片方へ移る。同じように、人差し指の腹で先端を押して、ゆっくり回す。左右交互に、リズムをずらしながら。

ぐりっ♡ ぐりっ♡ ぐりぐりぐり♡

「あっ♡ あっ♡ ふあッ♡♡」

孝一郎さんはなにも言わない。

今度は両方いっぺんに、指の腹で小さくトントンと叩き始めた。

とんっ♡ とんっ♡ とんとんとん♡

「ひうッ♡♡ あッ♡ あっ♡♡」

(小さい刺激なのに……ッ♡ 見えないから余計に、どこを触られてるか意識しちゃう……ッ♡♡)

体がびくびくと震える。乳首が硬くなって、触れるたびに過敏に反応してしまう。

(乳首ばかり……ッ♡下も、おまんこも、触ってほしい……♡♡)

気づいたら、そればかり考えていた。孝一郎さんの指が乳首をとんとんと叩くたびに、奥がひくりと反応する。疼いてたまらない。でも、孝一郎さんは一向に下へ移る気配がない。

(どうしよう……言えない、でも……♡♡)

「……あの♡」

「なんだ」

「……した、の方も……ッ♡」

「下がどうした」

意地悪だ。わかっていて聞いている。頬が燃えるように熱くなる。目隠しのまま、顔だけが赤くなっているのが自分でわかる。

「……触って、ほしくて……ッ♡」

「なら、自分で触れ」

「えっ……♡」

「聞こえなかったか」

繰り返すつもりはない、という声だった。

（自分で……ッ♡ 孝一郎さんの前で、自分で、おまんこを触るの……？♡♡）

羞恥心でどうにかなりそうだった。でも、奥の疼きはもう限界に近かった。

震える手がスカートの裾に向かう。ショーツの上から、おまんこにそっと触れた。

「ん……ッ♡♡」

自分の指なのに、いつもより敏感に感じた。目が見えないせいで、感覚だけが研ぎ澄まされている。

くちゅっ♡ と小さく音がして、濡れているのがわかって余計に恥ずかしくなった。

(孝一郎さんに見られながら、自分でおまんこ、触  
ってる……ッ♡♡ やだ、でも止められない……ッ  
♡♡)

震える指で、おまんこをゆっくりなぞる。割れ目  
に沿って、上下に擦る。布越しでも、しっとりと湿  
っているのがわかった。

くちゅっ♡ くちゅっ♡ くちゅくちゅ♡

「ふっ♡ んうッ……♡♡ あふっ♡ うぁ……ッ♡♡」

孝一郎さんは動じない。ただ、ゆるく乳首に触れ  
たまま、私を見ている。見えないのにわかる。気配  
がそこにある。

(どんな顔してるんだろう……ッ♡♡ 見えないか  
ら余計に気になって、意識しちゃう……ッ♡♡)

孝一郎さんの指が乳首をそっとつまんだ。

こりっ♡

「んく……ッ♡♡」

（乳首と、おまんこ、両方いっぺんに意識してる…  
…ッ♡♡ 全部繋がってくる感じ……ッ♡♡）

ショーツをずらして、おまんこに直接触れた。

ぬちゅっ♡

水っぽい音と、ぬるりとした感触がする。

「うっ……♡ ああ……ッ♡♡」

自分の指なのに、いつもとまったく違う感触だった。見えない分、指先の感覚だけが鋭くなっている。花びらの形を確かめるように、ゆっくりと触れていく。

（おまんこ、ぐちょぐちょ♡ こんなに濡れてるの、孝一郎さんはどう思ってるんだろ……♡♡）

くちゅっ♡ くちゅっ♡ くちゅっ♡

くにっ♡

「んあッ！！♡♡」

クリトリスに指が触れた瞬間、体がびくんと跳ねた。すぐに手を離した。けれど、孝一郎が許してくれなかった。

「そこ好きだろ。しっかり触れ」

指示のような言葉だった。それだけで、腰が震えた。

「で、でも……♡♡」

乳首に触れていた手が私の手をとって、クリトリスへと誘導される。

「あ……♡」

「ほら」



ゆっくり手を動かす。

くりくり♡ くりくりくり♡ こりっ♡ こりこり♡

「あんっ♡ ふあっ♡♡ はぁ……ッ♡♡」

孝一郎さんの手は元の位置へと戻っていき、乳首への刺激がまた始まる。相変わらず、ゆるい。焦らすような、届かない刺激だった。それをもどかしく思いながら、クリトリスをくるくると転がしながら、時折入口に触れる。指が動くたびに、声が勝手に漏れてしまう。

くちゅくちゅ♡ ぐちゅっ♡ こりこり♡ くちゅっ♡

「はぁんっ♡ ううッ♡♡ んんッ♡♡」

腰が勝手に揺れてしまっていた。乳首を触る指に押しつけるように、動いてしまう。孝一郎さんはなにも言わないけれど、わかっているはずだった。

(恥ずかしい……ッ♡♡ 腰まで動いてる……ッ♡  
孝一郎さんに全部見られてるのに、止まらない…  
…ッ♡♡)

孝一郎さんの指が、また乳首をそっとつまんだ。  
くりっ♡

「ひあッ♡♡」  
(乳首触られると、おまんこがビクって反応しちゃ  
……ッ♡♡ 全部繋がってビリビリしちゃう……ッ  
♡♡)

ぐちゅぐちゅ♡ くちゅくちゅ♡ こりこりこり♡  
ぐちゅっ♡

「あっ♡ あっ♡ ふっ♡ んひッ♡♡」  
(くる……ッ♡♡ くるくるくる……ッ！！♡♡ お  
まんこがジンジンして……ッ♡♡)

乳首をつまんだまま、孝一郎さんがそっと息を吐

いた。声じゃない。ただの呼吸。それだけなのに、  
耳に直接触れてくるみたいで、体中の産毛が一斉に  
逆立った。

「はあんっ♡♡」

ぐちゅっ♡ くちゅっ♡ こりっ♡ くちゅくちゅ♡  
くちゅくちゅ♡ くちゅくちゅ♡

「んうっ……♡ はぁ……ッ♡♡」

指が速くなっていた。無意識だった。気づいたと  
きには、腰がカクカクと揺れていて、もう止め方が  
わからなかった。

（孝一郎さんに見られながら……ッ♡♡ 自分でお  
まんこ触って……ッ♡♡♡ こんな、はずかしす  
ぎる……ッ♡♡ でも、でも……ッ♡♡♡）

「イくのか」

「んッ♡♡ イきますッ♡♡」

(イク……ッ♡♡ もうイきそう……ッ♡♡ 自分で触って、孝一郎さんに乳首をゆっくり責められながら……ッ♡♡ こんな恥ずかしいのに止まらない……ッ♡♡♡)

ぐちゅぐちゅぐちゅ♡ こりこりこり♡ くちゅくちゅ♡ くちゅくちゅくちゅ♡

「んああああッ！！♡♡♡」

ガクガクガクッ♡

全身が震えて、膝がベッドの上でガクガク♡と動いた。目隠しのまま、暗い視界の中で、光が弾けるような感覚だけがあった。自分の指がまだそこに触れていて、余韻のたびに体がびくんと跳ねる。

(いった……ッ♡♡ 自分でおまんこ触って♡♡ 孝一郎さんに見られながら……♡♡)

荒い呼吸が収まらない。顔が熱くて、目隠しの下

で目が開けられなかった。

しばらくして、頭の上に手が置かれた。大きな手のひらが、髪をゆっくりと梳いていく。

「イケたな」

その一言が、なぜか胸の奥に落ちてきた。

(孝一郎さん……♡♡)

目隠しのせいで表情は見えない。でも手の温度は本物だった。指の腹が髪を撫でるたびに、さっきまでの緊張がじわりとほどけていく気がした。

乱れた髪をゆっくりと整えるように、何度も、何度も撫でていく。

でも、体の奥はまだ疼いていた。

おまんこのナカがヒクヒクとしていて、欲しがっている。孝一郎さんの指も、それ以上も欲しい。

(足りない……♡ イったのに、全然、足りない…

…♡♡)

髪を撫でていた手が、静かに離れた。ベッドが軋む。立ち上がる気配がした。

「ま、待って……ッ♡」

声が出た。止めるつもりなんてなかったのに、体が勝手に動いていた。腕を伸ばして、孝一郎さんの服の端をつかもうとする。

「……入れて……ッ♡」

目隠しのせいで顔も見えない。でも今、どんな顔をされているのかが怖かった。呆れているのか、冷たく見ているのか、それとも——

孝一郎さんは答えなかった。

「お願い♡ 孝一郎さん……♡ お願い、入れて……っ♡♡」

返事はない。衣擦れの音だけが聞こえる。

「ずっと……ずっと、入れて、ほしくて♡ だから  
……♡♡」

声が震えた。情けないとわかっていても、止められなかった。奥がジクジクと疼いて、空っぽのまま締まって、それがどうしようもなく辛い。

「孝一郎さん……♡ お願い、だから……♡♡」

縋るように腕を伸ばしたけれど、指先は空を切った。届かなかった。

「また夜にイかせてやる」

それだけ言うと、孝一郎さんは静かに離れていった。足音が遠くなる。ドアの開く音がして、また閉まった。

その音が、やけにはっきりと聞こえた。

部屋に、自分ひとりの呼吸だけが残った。

「……それって、今日も入れてくれないってこと…  
…？」

しばらく、動けなかった。

目隠しを外す気力もないまま、ベッドの上に座って膝を抱える。暗い視界の中で、さっきの感触だけが繰り返し蘇ってくる。髪を撫でていた大きな手。ゆるくて、焦らすような乳首への刺激。「イけたな」という聞き慣れた声。

(ひどい……♡♡)

乳首はまだ敏感だった。体にシーツが擦れるたびにビクビクとしてしまう。おまんこは濡れたまま、疼き続けていた。いったのに、満たされていない。むしろ、さっきより奥が締まっている気がした。

(なんで入れてくれないんだろ……ッ♡乳首も触



ってくれた。クリも誘導してくれた。全部してくれたのに、なんで……ッ♡♡)

ゆっくりと目隠しを外した。昼の光が目にも染みた。まばたきを繰り返しながら部屋を見回す。孝一郎さんがいた場所には、ベッドの端に微かな跡が残っているだけだった。それがなんだかひどく寂しくて、膝をきつく抱え直した。

足りない。もっと欲しい。そのくせ、孝一郎さんじゃないと嫌だという気持ち、じわじわと体の奥に溜まっていく。

(次、また呼ばれたら……そのときは、入れてもらえるのかな……♡♡)

もう、借金のために孝一郎さんの相手をしている、ということはどうでもよくなっていた。

\* \* \* \* \*

夜になっても、疼きは収まらなかった。

(また夜にイかせてやる……か)

あの一言が、ずっと頭に引っかかっている。夜にまた同じことをされる。されてしまう。

けれど、また中途半端なまま終わってしまうのだろう。

(どうして、どうして入れてくれないんだろう……)

考えても答えは出なかった。出ないとわかっているけど、考えずにいられなかった。

窓の外はもう暗かった。山の夜は早い。街灯もなく、木々の輪郭が闇に溶けている。虫の声だけが、遠くから届いてくる。

静かすぎた。街にいれば車の音も、人の声も、なにかしら聞こえてくる。でもここには、虫の声と、自分の呼吸しかない。そのせいで、昼の記憶が余計に鮮明に蘇ってくる。孝一郎さんの手の温度。ゆる

くて焦らすような刺激。あの低い声。

(やだ……また思い出してる……)

シャワーを浴びて、ベッドに横になった。天井を眺めていると、体の奥がまたじくりとした。

自分でもう一度触れようかと思って、やめた。孝一郎さんに見られながらするのと、一人でするのは、なぜかまったく違う気がした。

(早く来てほしい……。でも来たら来たで、また焦らされちゃう……)

腹が立っているのか、期待しているのか、自分でももうよくわからなかった。何度も寝返りを打った。目を閉じてても、孝一郎さんの声が耳に残っていた。どうしても頭から離れない。足を閉じると奥が疼いて、開くと落ち着かなかった。

どれくらい経っただろう。

ドアがノックもなく開いた。

孝一郎さんだった。煙草の匂いが、夜の空気と一緒に入ってくる。部屋の灯りをつけないまま、ゆっくりとこちらに近づいてくる。月明かりだけが窓から差し込んでいて、孝一郎さんの顔に薄い影を作っていた。

「起きてたか」

「……はい」

昼間と同じスラックスで、シャツだけ変えていた。ネクタイはない。ボタンが一つ外れていて、いつもより少しだけ、素のような雰囲気があった。

(孝一郎さん……♡)

孝一郎さんはベッドの端に腰を下ろした。昼と同じ、煙草とかすかな香の匂い。暗い中でも、その存在感だけははっきりとそこにあった。

なにも言わなかった。ただ、こちらを見ている。  
月明かりの中で、その目だけが静かに光っていた。

（なんで……なにも言わないの……？）

沈黙が続くほど、体の奥の疼きが大きくなっていく気がした。

（もう、私が触る……！）

気づいたときには、体が動いていた。

ベッドの上で膝をついて、孝一郎さんへにじり寄る。孝一郎さんは動かなかった。ただ、静かにこちらを見ている。

その顔に、近づいた。そして自分から、唇を重ねた。

「……んっ」

一瞬、孝一郎さんの体がわずかに静止したのがわ

かった。驚いている。少しだけ胸がすっとした。でも、孝一郎さんはすぐに動いた。

乱暴にされるかと思った。押しのけられるかとも思った。でも、どちらでもなかった。大きな手がそっと頬に触れて、角度を整えるように、ゆっくりと唇を受け止めてくれた。

(……孝一郎さんから、キスしてくれてる……♡)

深くもなく、浅くもない。ただ、静かに重なっている。煙草のかすかな味がした。月明かりの中で、目を閉じると孝一郎さんの体温だけが感じられた。

もっと近づきたくて、シャツの胸元をそっと掴んだ。孝一郎さんは離れなかった。頬に触れていた手が、後頭部へとゆっくり移動して、角度をもう少しだけ深く変えた。

(ッ……♡♡)

唇がわずかに開いて、また重なる。柔らかい圧が

続いて、それだけなのに膝の力が抜けそうになった。

ちゅっ♡

「……んっ♡」

キスが深くなる。孝一郎さんの息が唇に触れて、それだけで全身がぞくりとした。昼間にどれだけ触れられても引き出せなかったなにかが、キスだけでじわりと溢れてくる気がした。

ちゅっ♡ ちゅっ♡ ちゅっ♡

何度か重なって、また少し離れる。息が混ざる。額と額が触れそうなくらい近かった。目を開けると、暗い中でも孝一郎さんの目がすぐそこにあった。

「……自分から来ておいて、そんな顔をするな」

「……どんな顔、してますか♡」

もう一度唇が重なった。今度はさっきより深かった。

(ッ……♡♡)

後頭部を支えられたまま、深く深くキスをされた。舌先が触れて、思わず喉の奥から小さな声が漏れた。

「……んッ♡♡」

シャツを掴む手に力が入った。もっとこのままでいたいと思った。昼の焦燥も、疼きも、全部どこかに押しやられて、ただこの温度だけが全身に広がっていく。

唇がゆっくりと離れ、細い糸が引いた。

(キス、終わっちゃった……♡)

名残惜しくて、無意識に唇を舐めてしまった。孝一郎さんの視線がそこに向いているのがわかって、また顔が熱くなった。

「自分から来るとは思わなかった」



「……っ、だって♡♡」

（だって、ずっと待ってたんだもん……ッ♡♡ 昼からずっと、ずっと……ッ♡♡）

「ずっと、疼いてて……。眠れなくて……ッ♡」

孝一郎さんは答えなかった。ただ、頬に触れたままの手が、ゆっくりと顎の下へ移動した。

顔を持ち上げられる。

（見られてる……ッ♡）

視線がはっきりとわかった。品定めするような、でもどこか熱を孕んだ目。その目に捉えられると、昼間の悔しさも、腹立たしさも、全部どこかに消えていく気がした。

孝一郎さんが静かに立ち上がった。

「あ……」

また行ってしまうのかと思った瞬間、肩を押され

た。柔らかく、でも確実に。背中がベッドに沈む。  
孝一郎さんが覆い被さってくる。

煙草と香の匂いが、鼻の奥に広がる。頬に触れていた手が、今度は髪をゆっくりと梳いた。

「今度は俺がする番だろ」

何度も聞いた低い声が、耳のすぐそばに落ちてきた。

(っ♡♡♡)

体中がぞくとした。昼間ずっと焦らされていた分、その一言だけで、奥がひくりと反応してしまう。

「……はい」

声が震えた。孝一郎さんの手が、ゆっくりとシャツの裾へ向かっていく。

昼と同じように、無言で裾を引き上げた。腕を持

ち上げてくれて、袖を抜かせてくれる。暗い部屋の中で、上半身が空気に晒された。

(また、見られてる……ッ♡♡)

次にブラのホックへ。慣れた手つきで、ぱちりと外す。肩紐がずり落ちて、するりと引き抜かれた。

孝一郎さんの手はすぐにおっぱいには触れなかった。

少し間があって、サイドテーブルに手を伸ばした。引き出しを開ける音がする。なにかを取り出す気配がした。孝一郎さんの手の中に小さくて丸いものが見えた。

(……ローター……ッ♡)

顔が熱くなった。

カチッと音がして電源が入ると、ローターがブルブルと振動を始めた。そのまますぐ、乳首に近づけられ、ぐ♡と押しつけられた。

「ひうっ！！♡♡」

体の準備なんてまったく間に合わなかった。

体がびくんと跳ねた。細かい振動が、乳首の先端から全身に広がっていく。

ブルブルブル♡ ブルルルル♡

「ふあああ！♡ やっ、やっ♡♡」

孝一郎さんはゆっくりと乳首の周囲を撫でるように動かす。先端に当てたり、外側を滑らせたり、じわじわと場所を変えながら。振動が当たるたびに腰が揺れて、体が正直に反応し続けた。

「んんっ♡♡ あっ♡♡ あっ……やだ、やだっ♡♡」  
(乳首、じんじんしてくる……っ♡♡ 振動が止まらなくて、ずっと同じところが……っ♡♡♡)

ブルルルル♡ ブルブル♡

「はぁ♡♡ ひゅうッ♡♡ んッ♡♡ んんんッ♡♡」  
「昼はもっと触って欲しそうだったからな。よく触  
ってやる」

ローターが乳首の先端にぴたりと押し当てられた。  
ブウンン♡♡

「んあぁぁッ！！♡♡ やぁ♡♡」

さっきより強い振動が、乳首から胸の奥まで突き  
抜けた。腰が勝手に動く。ベッドのシーツを掴んで、  
でも逃げられない。

ブルブルブルブル♡ ブウンン♡♡

「あうう♡♡ も、やぁッ♡♡」

「我儘だな。昼は自分で腰を動かすくらい、欲しが  
っていただろ」

「んんッ♡♡ だ、だってえ♡♡」

（止まらない……ッ♡♡ 強すぎる♡♡ ずっと振動  
してて……ッ♡♡ 乳首だけで奥まで響いてくる…

…ッ♡♡)

じわりと太腿の内側が濡れてくるのがわかった。  
乳首しか触れていないのに、おまんこがひくひくと  
反応していた。

孝一郎さんが、ローターを今度は反対の乳首へと  
移した。

ブウンッ♡

「う ああっ♡♡」

あっという間に反対の乳首も硬くなった。同じよ  
うに先端に押し当てられて、じわじわと振動が広が  
っていく。

ブルルル♡ ブルブルブル♡

「ああ♡♡ あああ♡♡ ふあ♡♡ ふうう♡♡」

(両方、両方おかしくなってくる……ッ♡♡ 片方  
ずつ丁寧に責められてる……ッ♡♡)

左右交互に、リズムをずらしながら当てていく。  
右に当てると思えば左に移って、また右へ。どこに  
来るかわからないから、体が緊張したままほぐれな  
い。呼吸が追いつかなくなってきた。

ブルッ♡ブルッ♡ブルルル♡

「あっ♡♡ あっ♡♡ んんっ♡♡ やっ、待……っ♡  
♡」

（これ、だめ♡♡ 乳首だけでイきそう……っ♡♡  
昼より全然強くて……っ♡♡）

「んあぁぁ……っ♡♡ ッ、や……っ♡♡」

ブルブルブルブル♡ ブウンン♡♡ ブルブル♡

「はあんっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ ッ……もう……  
やっ、イきそ……っ♡♡」

そのまま右側に、なにか別の温かいものが近づい  
てくる気配がした。ふわりと、熱い息がかかった。

(孝一郎さん？♡)

考える間もなかった。右の乳首に唇がそっと触れて、ゆっくりと吸い上げられた。

じゅるるっ♡

「ひいいッ！！♡♡」

吸われながら、左にはローターが当たり続けている。

ブルルル♡ じゅるるっ♡

「あああッ！！♡♡ やっ♡♡ 両方っ♡♡ 両方いっぺんはっ！！♡♡」

孝一郎さんの舌が、乳首の先端をくるりとなぞった。同時にローターが押しつけられる。

ちゅっ♡ ブンン♡

「んッ♡♡ ぐんっ！！♡♡」



（口で乳首吸われながら、反対の乳首は、ローターが……ッ！！♡♡）

舌が乳首の周りをゆっくりと舐め回した。ざらりとした感触が、振動とはまた別の鋭さで体に刺さる。  
ちゅくちゅく♡れろり♡ブルブルブル♡

「うああ♡♡♡んッ♡♡んッ♡♡やだぁっ♡♡」

孝一郎さんが乳首を強く吸い上げた。  
じゅるるっ♡

「んひいいッ！！♡♡♡」

腰が浮き上がった。その拍子に、さらに強くローターは当てられ、いっそう強く乳首を吸い上げられた。

ブウンンンンン♡じゅるううううっ♡

「んああああッ！！♡♡♡」

ガクガクガクッ♡

全身が震えた。腰がのけぞって、膝がガクガクと動く。おまんこの奥が勝手に締まって、ヒクヒクと収縮した。

「はぁっ♡ はっ♡ ……はぁ♡」

荒い呼吸が収まらないまま、孝一郎さんの手が動いた。

太腿の内側をゆっくりと撫で上げてくる。乳首イきたばかりで体中が過敏になっていて、それだけでびくっとした。

(ッ♡♡……来る……ッ♡♡)

指先が内腿を滑り上がってくる。おまんこのぎりぎりのところで止まった。触れていない。でも、気配だけでそこがぬるりと濡れた。

「派手にイったな」

「……ッ♡♡」

指先がおまんこの入口にそっと触れた。

ぬちゅっ♡

(下……来る……ッ♡♡)

ローターが太腿の上をゆっくりと滑り上がってくる。

ブルブルブル♡ ブルルルル♡

「ん♡♡ ふ、ううっ♡♡」

(来る、来る……ッ♡♡♡ でもまだ当たってない  
……ッ♡♡ じらされてる……ッ♡♡♡)

ぎりぎりのところで止まった。おまんこのすぐそばで、振動だけが伝わってくる。触れていないのに、気配だけで内側がじゅわりと濡れた。

「……孝一郎さん……ッ♡♡」

「なんだ」

「やだ……ッ♡♡」

「なにがだ」

「クリ……は……、♡♡」

言い終わる前に、ローターがクリトリスにぴたりと当てられた。

ブウンッ♡

「んああああ！！♡♡」

腰が浮き上がった。乳首とはまた違う、直接的で鋭い刺激が走った。細かい振動が、敏感な場所で集中的に動く。孝一郎さんはクリトリスの先端に当たたまま、ゆっくりと小さく円を描き始めた。

ブルルル♡ くりくりくり♡

「んひいいい！！♡♡ ああっ♡♡ あっ♡♡」

（だめ、これッ♡♡ ずっとクリいじめてくるっ♡♡ 乳首でイったばかりなのに……♡♡ もう次が

来てる……っ♡♡)

太腿がぶるぶると震えた。閉じようとしても、孝一郎さんの腕が邪魔で閉じられない。開いたまま、全部見えたまま、振動に晒され続けた。

ブウンンン♡ ブルブルブルブル♡

「ふああ♡♡ んあッ♡♡ んあッ♡♡ も、もうっ♡♡」

ブウンンン♡

「んあああッ!!!♡♡♡」

ガクガク♡ ガクン♡

体がのけぞった。腰が浮き上がって、シートから離れそうになる。孝一郎さんの手のひらが腰を押さえた。

「やああ!!!♡♡ イっでる♡♡ イっでるのお!!!

♡♡」

(逃げられない……ッ♡♡ 押さえられてる……ッ  
♡♡ どこにも行けない……ッ♡♡)

ブルブルブルブル♡ ブウンンン♡

「やぁ♡♡ やだやだッ！！♡♡」

今度はクリトリスの周囲を大きくぐるぐると回した。先端に当たったり、外れたり、また戻ってきたり。

ブルルル♡♡ くるくるくる♡♡ ブウンッ♡♡

「ひいいいッ！！♡♡ んッ♡♡ んッ♡♡ くる……  
くる……ッ♡♡♡」

指が速くなるみたいに、腰が勝手に振動を追いかけ始めた。ローターに押しつけるように、前後に動いてしまう。

ブルブルブルブル♡ ブウンンン♡

「ああああッ！！！！♡♡♡」

全身が震えた。孝一郎さんに腰を押さえられたまま、膝がガクガクと動いた。おまんこがヒクつくけれど、ローターはまだそこにあって、余韻のたびに体がびくびくと跳ねた。

「ひゅ……ッ♡♡ んッ♡ やっ……まだ当たって…  
…ッ♡♡」

荒い呼吸が収まらない。太腿がぷるぷると震えている。目からは生理的な涙が伝っていた。

その時、入口に指先が触れた。

ぐちゅっ♡

「ふああ……ッ♡♡」

指が一本、ゆっくりと押し入ってくる。さっきまでクリをローターで責められていて、ナカまで敏感になっていた。指が奥へ進むたびに、内側がぎゅっ

と締まった。

ぬちゅちゅっ♡

「んああ……ッ♡♡ ナカ……ナカに入ってる……  
ッ！！♡♡」

指がゆっくりと出入りし始めた。抜きかけてから、  
また根元まで押し込む。くちゅくちゅと音を立てな  
がら、丁寧に、繰り返す。

ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡

「んくう♡♡はあ♡ふあっ♡♡」

そこで、ローターが戻ってきた。

ブウンン♡

「うああ！！♡♡」

指がナカに入ったまま、クリトリスに振動が当た  
った。二つの刺激が同時に来て、頭の中が真っ白に



なった。

(ナカと、クリと……っ♡♡ 両方いっぺんに……  
っ♡♡ 全部まとめておかしくなってく……っ！！  
♡♡)

「両方の方がいいだろ」

指がナカの前壁を押しながら出入りして、クリにはローターが当たり続ける。ぐちゅぐちゅと音を立てながら、指が動くたびに振動が奥まで響いてくる気がした。

ブルブルブル♡ ぬちゅぬちゅ♡ ブウンン♡  
ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ♡ ブウンン♡

「あひいいッ！！♡♡ イくッ♡♡ イきますうう  
ううっ！！♡♡」

腰が勝手にのけぞった。足の先まで電流が走るみたいな感覚がして、つま先がぎゅっと丸まった。おまんこの奥が波打つように何度も締まって、指を押

し出そうとしながら、でも離したくなくて引き込んでいた。視界の端で、白い光がちかちかした。

「ッ……ああ……ああ……ッ♡♡」

波が引くたびに、また次の波が来た。体の芯からじわじわと痺れが広がって、指先まで力が入らなくなっていく。

孝一郎さんがゆっくりとローターを離した。ナカから指を抜いた。

ぐったりとベッドに沈みながら、指の温度だけが奥に残っている。

「あ……ッ♡♡」

(空っぽ……ッ♡♡ 全然、足りない……ッ♡♡♡)

孝一郎さんの気配がすぐそこにある。体温が近い。煙草と香の匂いが、暗い部屋に満ちていた。

「……孝一郎さん♡」

声が震えた。

「どうした」

「おちんぼ、入れて♡♡ やっぱり、……入れて、  
ほしくて……ッ♡♡」

孝一郎さんは答えなかった。少し間があった。

「……俺は高いぞ。借金が嵩むことになるが、いい  
のか」

(借金……)

頭の中でその言葉が転がった。

借金。そうだ。最初からそういう関係だった。な  
のに今この瞬間、そんなことはどうでもよかった。

「いい、いいですからッ♡♡」

「本当にいいのか？」

「お願い、だから……ッ♡♡ 入れて♡♡ 孝一郎さ  
んの、おちんぼ欲しい♡♡」

自分でも驚くくらい、はっきりと言えた。恥ずかしさより、欲しいという気持ちが全部上回っていた。  
短い沈黙があった。

「……仕方のないやつだ」

孝一郎さんがふっと笑った。

(あ、笑って……)

それに見惚れている間に、孝一郎さんがスラックスをずらして、下着ごと引き下げた。

(ッ……♡♡)

大きなおちんぼが目の前に現れる。

熱くて、太くて、ずっしりとした存在感があった。  
完全に勃起上がっていて、先端が赤くなっている。  
青筋が浮き出たそれが、視線を引き離せなかった。

(勃ってる♡♡ 孝一郎さんも、こんなに……ッ♡♡)

その事実だけで、おまんこの奥がきゅっと締まった。太腿の内側がじわりと濡れていくのがわかる。

「挿れるぞ」

「んひっ♡♡♡」

足をさらに広げられ、割れ目にあがわれる。そのまま亀頭が膣口をみちみちと押し広げる。先端が入ってしまえば、あとは一気だった。低く息を吐いて、腰を使って奥まで押し込んでくる。

ずちゅうう～～～ッ♡

「んッ♡ ……ッ、あああ！！♡♡」

圧倒的な質量に一瞬息が詰まる。太さも長さもあって、私の体を深く征服するようだった。

「ふあああ♡♡」  
(おちんぼ♡ 孝一郎さんのおちんぼが、ナカに…  
…ッ♡♡)

ずっと欲しかった。何度もねだって、何度も焦ら  
されて、ようやく。おまんこの奥がうねるように反  
応して、ぎゅっと締まってしまう。

「締めすぎだろ」  
「ら、らってえ♡♡」

意識が飛びかけている私の上体を引き起こして、  
孝一郎さんは再びおっぱいを揉み始める。むにゅむ  
にゅ♡と揉まれると、おまんこがキュンキュン♡  
と反応して、おちんぼを締めつけてしまう。

「あっ♡♡ あ……ッ♡♡♡ 乳首ぎゅってしないで  
……ッ♡♡」

「膣が締まってるぞ。気持ちいいんだろ」  
「んひい……ッ♡♡ あんッ♡♡ 乳首……やだ……

ッ！！♡♡」

こり♡ こり♡ こり♡ こり♡ ぎゅむ♡ ぎゅむ♡  
くにくにくにくにっ♡ ぎゅうう～～♡

「んあああ～～～ッ！！！！♡♡♡」

乳首がつままれて引っ張られて、背をしならせて  
絶頂してしまう。

「本当にイきやすい体してるな」

ばちゅんっ♡

「ひううッ！？♡♡」

重い一撃で奥まで叩きつけられる。孝一郎さんが  
腰を据えて、本格的に動き始めた。

ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡

「んっ♡♡ んっ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡」

ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡ ぱんっ♡  
ぱんっ♡

「あッ♡♡ ふあぁ♡♡ あっ♡♡ あっ♡♡ あぁッ  
♡♡」

ぬちゅぬちゅと血管の浮き立ったモノが激しく出入りしている。

腰を掴んで押さえつけて、ぶつかるたびに結合部からくちゅくちゅと音がする。

子宮まで届いてしまっているのがわかる。亀頭で奥を叩かれるたびに、快楽が絶え間ない衝撃となって私を貫き続ける。

（硬いのが奥まで来てる……♡♡ 気持ちいい……  
ッ♡ 私、また……ッ！！♡♡）

「んっ♡♡ んっ♡♡ ふあぁッ♡♡ またイクイクイク……ッ！！♡♡」



腰がガクガクと揺れた。

「ん〜〜〜！♡♡♡ あぁッ♡♡ おまんこ……おまんこ、変になるぅ♡♡」

「ずっと欲しがってたろ。もっと味わえ♡」

どちゅっ♡ どちゅっ♡ どちゅっ♡ どちゅっ♡  
どちゅっ♡

（イってるのに止まらない……ッ♡♡♡ 孝一郎さんが全然止まってくれない……ッ♡♡♡）

孝一郎さんは腰を振り続けて、一番奥のやわらかいところを繰り返して突いてくる。私はガクガクと震えながら絶頂することしかできない。

孝一郎さんは私が何度イっても構わない。

ぐったりした体を抱えて、痙攣するおまんこを突き続ける。ヒダが絡みついて、奥まで擦れるのが強すぎて気持ちいい。

(ああ、気持ちいい♡♡ おちんぼ、気持ちいい♡  
♡ 気持ちいい♡♡)

どちゅんっ♡ どちゅんっ♡ どちゅんっ♡ どちゅ  
んっ♡ どちゅんっ♡

「んっ♡ んっ♡ んっ♡ んっ♡ んああ♡♡」

「……出すぞっ！♡」

どちゅんッ！♡

ドピュッ♡ ドピュウウウ♡

「あああああッ！！！！♡♡♡」

孝一郎さんが限界に達する。奥までおちんぼを押し込んで、ぐっと止まった。溜め込んでいた射精は長く、量が多かった。私はぶるぶると震えて、絶頂の痙攣が止まらない。

「ふああ♡♡ んっ♡♡ んっ♡♡ やだ、待って、

出ちゃうッ♡♡」

絶頂しながらも、下腹の奥に溜まっていく感覚があった。

「あッ♡♡ あ♡♡」

（また潮吹いちゃう……ッ！！♡♡）

必死に下腹に力を入れた。溜まっていくものを、なんとか堰き止めようとする。足を閉じようとしても、孝一郎さんがいて閉じられない。

「……ッ……んッ♡♡」

声が漏れないように唇を噛んだ。体の奥がじゅうじゅうと圧迫されていて、我慢するほどに下腹が張っていく。

「……我慢してるのか？」

孝一郎さんの指が、クリトリスに触れた。

こりっ♡

「ひ……ッ♡♡♡ やっ、そこは……ッ♡♡」

「出せばいい♡」

「だめ♡♡ やだ♡♡ 我慢するのッ♡♡」

指がクリトリスをくるくると転がし始めた。

くりくりくり♡ こりこりこり♡

「ふああ♡♡ やっ、やだ♡♡ 止めてッ♡♡」

（我慢してるのに……ッ！！♡♡ クリ触られたら♡♡ もっと溜まってくる♡♡）

下腹の圧がどんどん高まっていく。堰き止めようとすればするほど、指の刺激が追い打ちをかけてくる。

くりくりくりくり♡ こりっ♡ こりこりこり♡

「んッ♡♡ んッ♡♡ やっ、出ちゃうッ！！♡♡ 出

ちゃうから止めええ！！♡♡」

「出るまでやめない♡」

孝一郎さんの指がクリトリスを強く押した。

「ほら、出せ♡」

ぐりいいいいっ♡

「ひいいいッ！！！！♡♡♡」

ぶしゅっ♡

堰が崩れた。我慢していた分が一気に溢れて、止められなかった。太腿を熱いものが伝って、シーツを濡らして、それでもまだ出続ける。体中の力が抜けて、孝一郎さんに体を預けるしかなかった。

ぷしゃっ♡ ぷしゃっ♡

「ッ……はっ♡♡ はぁッ♡ 出てる……出てるぅッ♡♡」

孝一郎さんはそのまま顔を近づけてくる。唇が塞がれた。舌が入ってきて、小さな舌をちゅるっと吸い上げる。

「……んむっ♡♡ んんッ♡♡」

潮吹き之余韻でまだぴくぴくと震えながら、孝一郎さんのキスだけを受け止めた。ゆっくりで、深く、さっきまでの激しさとは全然違う。

「お前は、俺のものにする」

「……孝一郎さんのもの……♡♡」

頭がぼんやりとしていた。何度もイカされて、体中がとろとろに溶けている。

「いいな？ その代わり、借金はなしだ。俺のものになるんだからな」

「しゃっきん……」

「明日から毎日奥までハメてやる♡」

「毎日……♡♡」  
（毎日……ッ♡♡ 毎日、孝一郎さんに……ッ♡♡）  
「……返事は」  
「……孝一郎さんの、ものにしてください……ッ♡♡」

孝一郎さんが短く息を吐いた。満足そうな、それだけの音だった。大きな手が頭を軽く撫でる。

「そうか」

また涼しい顔だった。でも撫でる手は止まらなかった。

（孝一郎さん……ッ♡♡）  
「明日から、ハメられる覚悟しとけよ♡」  
「……はい♡♡」

返事をしながら、口の端が上がるのを止められなかった。